教職大学院 Newsletter No.180

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.3.29（公開版）

支える側の学びの変換への企図の現段階

学びを支える実践と省察のコミュニティを

～地域を結び・世代を重ね発展させていくために～

福井大学連合教職大学院 教授　柳沢　昌一

研修観の転換・支え手の学びの発展への企図の多様な展開

否応なく複雑化し、不安定化が進む世界の中で、不安に駆られ非現実的な短期的解決策を求め右往左往するのではなく、また逆に変化に眼を背けこれまでの安定に固執するのでもなく、状況を慎重に探りそこに働きかけ、その展開を読みとりつつ長期的な展開の可能性を見定め、状況探究と実践組織の力そのものを培っていく。そのための実践・省察を通した学びのアプローチをどのように発展させていくのか。確実と目されてきた知識技術の迅速正確な伝達・習得に特化した学びから、探究・実践・省察とその持続的・発展的なサイクルによって特徴付けられる新しい学びへの転換という課題が世界の教育改革の前線で繰り返し提起され続けてきました。2023 年度は、その転換の実現にとって必須の礎となる、新しい学びの支え手自身の学びのあり方に焦点が当たり、その転換のために多様な連動した展開が始まる画期となりました。福井大学に関わる限りですが、その概略をふり返っておきたいと思います。

“「新たな教師の学びの姿」の実現” を副題に掲げた 2022 年 12 月の中央教育審議会答申を受け、23 年当初より、日本における教員研修のセンターである教職員支援機構において、新たな「NITS 戦略」に基づき、まず機構内での協働探究型の学びへの企図が組織的に取り組まれ、夏以降二つの長期的な協働探究のサイクルが出発、さらに秋には研修のデザイン・マネジメントを主題とする協働探究型研修が重ねられていくことになります。学校において、また集合研修を通じて、支え手の新たな学びの可能性を探ろうとする担い手が全国から集い、取り組みを交

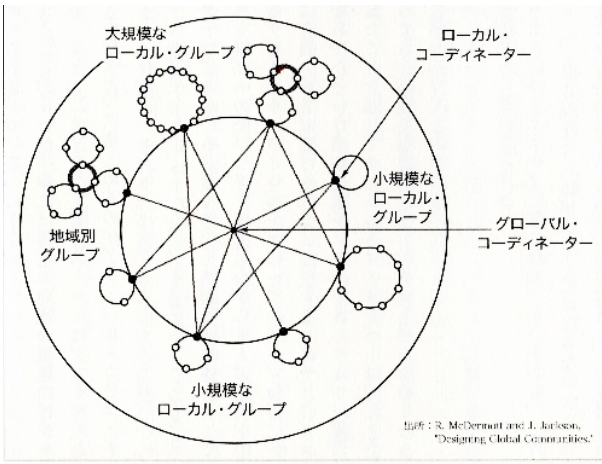
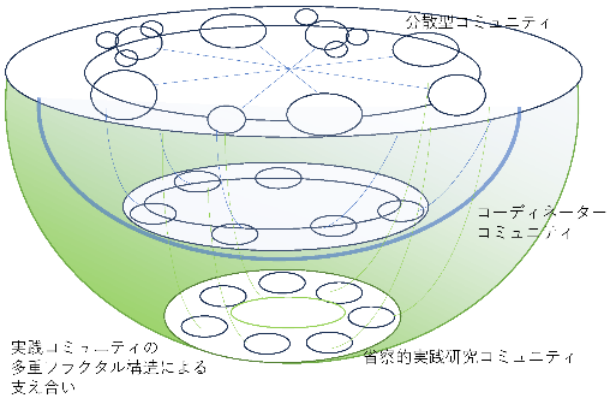


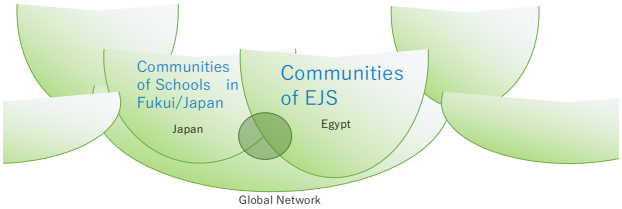
図6-1　グローバル・コミュニティのフラクタル構造

内容

巻頭言　(1)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより　(4)
ラウンドテーブル報告（参加者からの感想）　(6)
教職大学院での学びの省察（ラウンドテーブル）　(20)
教職大学院での学びの省察（長期実践報告/長期実践報告会）　(31)

流し省察しつつ展開を探っていくセッションは、学び合う専門職としてのコミュニティを培う、ひらかれた〈コーディネーター・コミュニティ〉の可能性





S.YANAGISAWA　University of fukui 202401

につながっています。

福井大学教職大学院・総合教職開発本部では、これまで福井県教育委員会・教育総合研究所との協働によって培われてきた協働探究型研修の蓄積を踏まえて、教職員支援機構の企図に当初より全面的に協力していくことになりましたが、機構の取り組みの展開を通して、全国各地の学校・研修センターにおける改革への模索に直接接する機会を得たことは、福井にとってもこれまでの取り組みの意味を照らし返し今後の展開可能性を探る貴重な機会となっています。

大学院・本部では、並行して複数の研修改革のチャレンジが進むこととなりました。「教員研修高度化」のための特別な予算と関わり三つのプロジェクトが連動して進められました。一つは、校内研修においてカンファレンスと記録化を通して実践の展開と省察をめざす、一つ目は教職大学院における中心的なアプローチの進化拡大をめざす企図であり、二つ目はそうした校内研修を支援する人的なネットワークの拡充のための企図、そして三つ目は、省察的・探究的な研修を通して培われる実践の把握・省察の力の発展を捉えるためのアプローチの開発をめぐる取り組みです。

これらに加え、本年度はエジプト・ヨルダン・タイをはじめとする国々おける教育改革の担い手となる先生方の長期的な学びを支える研修も、コロナ禍の中断を経て、対面により集中的に展開されることになりました。附属学校・福井をはじめとする拠点校における子どもたちの長期的な協働探究とそれを支える先生たちの学びに接しながら 1 ヶ月にわたる密度の濃い研修が重ねられているエジプト教員研修は、研修での学びの深まりを共有する探究記録の蓄積・共有とエジプト本国における学校での取り組みの発展にも支えられ、毎回着実な探究の質の発展を、この取り組みに関わる多くのみなさんと実感しまた共有しています。

こうした研究改革の多様な展開と密接に関わりそれを支える実践的な拠り所としての役割も果たしながら、福井県内における教育研究所における中堅教員研修・マネジメント研修、嶺南教育事務所における研修改革、幼児教育・特別支援教育の専門研修が、いずれも協働の探究と省察を基調として持続的に、またさらに工夫を重ねながら展開されてきています。社会教育の担い手についても、北陸三県の協力での社会教育士のための講習が持続的に取り組まれています。

そして、こうした一連の多様な展開と結び、学びながら、分散型コミュニティとそのネットワークを支える実践研究拠点としての教職大学院・総合教職開発本部における実践・省察・研究のサイクルが重ねられています。2001 年より、共有され積み重ねられ『長期実践研究報告』は本年度、新たに紡がれた 55 の記録を含めその集積は 600 冊を超え、さらに広く共有するためのアーカイブが組織されることになりました。実践研究誌『教師教育研究』も 30 を超える論稿を収めた 16 巻が刊行され、またそれぞれの実践・省察の今を共有するこのニュースレターもまた 180 号に達しています。

協働探究としての専門職の学びをひらき、持続的に支えるコミュニティを実践の場においてこそ培

い、そしてそれを支えるために、個々の分散するコミュニティを結び支え合うための〈コーディネーター・コミュニティ〉、〈実践研究コミュニティ〉のネットワークを編んでいく。教職大学院出発以来のコンセプトとアプローチは、小さな渦から、次第に多様で多層の編成態へと展開してきています。2024年度は、新たに展開しつつある多様な企図を、互いに支え合う持続的な発展のサイクルに結んでいく次の重要な局面に入っていくことになると思います。

長期的な展開をとらえる歴史的なフレームのために

最後に、この年が私個人にとっても福井大学における仕事の節目に当たることもあり、教育実践の展開をめぐる長期的なフレームをめぐって、一言触れておきたいと思います。

長期実践研究報告のアプローチとその意義に関わり、自身の実践展開をとらえる長いものさしを構成していくことの重要性について、時に触れて共有してきました。世代を継いで培われてきた学びとその支援としての教育の編成と文化を、発展的に再構成していく教育改革の企図は、それが培われきた時間に匹敵する持続性が求められることになります。その実践展開よりもさらに長い改革プロセスをとらえるものさしが、教育改革への企図の先行きをより確かなものとするために、求められていると思います。教職大学院発足から 15 年近く、大学院学校改革実践研究コースの出発から 25 年、「学習過程研究」というその最初の小さな研究グループの始まりから 35 年にわたって重ねられてきた実践展開の内在的な省察・研究としての記録と世代のサイクルの持続を基盤として、私たちは今、より長い歴史的な企図の検証と世界的な改革動向の追跡、将来的な展望によって問いをさらに開きながら、超長期的な改革プロセスを跡づけ見通すためのより確かなフレームを構築しより広く提起していく役割と責任を、私たちの協働の実践研究コミュニティとして担っていくべき段階に来ていると感じています。近代教育の起点にあいて、ひらかれた(öffentlich)社会の主体としての判断力と理性を培う教育実践の長期的な展開とそれを支えるべき教育の学の発展に期待を寄せたカントは、その遺言とも云うべき最後の刊行書『教育学』(1803)の中で次のように述べています。

「教育は人間に課せられた最大の課題であり、最も困難な課題に他ならない。（中略）それゆえに、教育はまた一歩ずつ前進するほかはなく、しかもある世代がその経験と知を次の世代に引き継ぎ、その世代がさらにまた何かを付け加えて次の世代に委ねるという仕方でしか、教育をめぐる Art(Kunst)に関わる適切な概念は実現しえない」。

その後の幾世代による実践と省察・研究を引き継ぎ、発展させながら、私たちの世代もまた、その長い教育への企図のサイクルの中で、私たちの世代としての責務を、より自覚的に、果たしていきたいと願っています。

引用文献

カント「教育学」，加藤泰史訳『カント全集』17，岩波書店，2001，p.226.

ポパー「イマニエル・カント　啓蒙の哲学者」『開かれた社会とその敵』1 下岩波書店，2023

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

フィリピンの全体的な教育改革についての実践を回顧して

ミドルリーダー養成コース１年/福井市役所　Santamaria Juan Florencio

I participated in the Fukui Round Table held on the 17th and 18th of February, 2024. I was originally meant to join the offline session, but a sudden fever and general sickness forced me to instead join the online session. Joining me in the online session were Mhawi, currently serving as an executive assistant in the Philippines' Department of Education, and Virna, a teacher at Fuzoku Elementary School. Mhawi's presentation was titled "Collaborative Learning in the Philippines." In this presentation, he discussed the Filipino government's 4-part plan to implement long-overdue educational reforms. The first step of was development of the new "Matatag" ("firm" or "solid" in Tagalog) curriculum. This was a more focused and intensified curriculum meant to impart unto Filipino students modern skills and competencies that would allow them to stand on the international stage. The second step was ensuring that the Matatag curriculum could be smoothly implemented. It was deployed in pilot schools in phases (grades 1, 4, and 7 this year; grades 2, 5, 8 the next year; etc.) for the sake of gaining insights on large-scale implementation, determining what support teachers and students would need in its implementation, and identifying what complications and difficulties existed in the program in its fledgling form. Reagan lovers rejoice, for this curriculum's teaching training was done in a sort of trickle-down format: national trainers passed their knowledge onto regional trainers onto division trainers onto school-based trainers. The third step was holding "collaborative expertise sessions" through "local action cells," school-based communities in which teachers could collaborate and share their expertise. Discussions were primarily focused on planning, reviewing each other's teaching, sharing effective teaching materials, and discussing other relevant concerns. One thing that especially surprised me was the amount of consideration given to teachers and their potential feelings on the new curriculum. "Would the teachers want bonuses or more PTO?" "How can we incentivize the implementation of this new curriculum?" "How do you compensate for teachers making different interpretations across different training levels?" The Philippines is also my country of birth, so I would love to one day visit Filipino schools and see the Matatag curriculum in action.

「自律した学び手」の育成に向けて

学校改革マネジメントコース１年/加賀市立錦城小学校　坂口　明美

福井大学教職大学院に入学させていただき１年が過ぎようとしている。私の研究テーマは、「自律した学び手の育成」を実現させるための人材育成を中心とした学校経営の在り方である。学校には、よりよい子どもたちの育成を通して、よりよい社会を創造するという使命がある。この具現化に向けて、全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、子どもたちの学びを転換し、自律した学習者へと導くための学校経営の在り方を、授業研究を人材育成の柱とした取組を通して追究している。

現任校に赴任する前には児童数 100 名程の小規模校にて校長として 3 年間勤務した。4 月に赴任した本校は児童数 328 名、教職員数 39 名の中規模校。担任の 7 割が 20 代、30 代の若手教員、産・育休者が 5 名、40 代は 2 名しかおらず若手が多い学校となっている。主任も 20 代後半と 30 歳になったばかりの若手教員。教頭と教務も今年度初任。あらゆる面でサポートが必要であると同時に、より高い危機管理意識が必要な状況である。

そこで年度当初には、児童の課題を全員で洗い出し、焦点化させた取組をスタンダードとして教職員と児童が共有した。その克服に向けての取組も、学校研究と生徒指導を中心とした授業改革により行ってきた。1 学期間で 13 ほどの取組を実践した。

まずは、学級力アンケートの取組を全校で共通実践した。5 月に生徒指導主事に授業を公開してもらい、全学級で継続して取組を推進してきている。

次に、最も重要な学校研究では、「主体的に学び、自分の考えや思いを表現し、伝え合う子の育成～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して～」とし実践を重ねてきた。自由進度学習を取り入れ、1 学期は個別最適な学びの取り入れ方を中心に研究し、2 学期は協働的な学びの効果的な在り方も視野に入れながらの研究とした。学校全体で実践を進めてきてはいるが、教員によって温度差があり、その点が課題となっている。ただ、この取組により、教員 2・3・5・7 年目の若手教員が、意欲的に実践を公開し授業改革への意欲を高めている。

特に 3 学期に入ると、自由進度学習で 2 教科の学習計画を児童に委ねる「マイプラン学習」に取り組む学年も出てきて、児童の学びへの意欲を高めている。また、単元内自由進度学習にも果敢に挑戦し、児童の学習の習得率も高まってきている。他にも先進校での取組を基に、漢字学習について子どもに委ねる取組も実践し成果を上げている。

夏期集中講座では「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、実践コミュニティ創造の重要性を痛感した。現在、加賀市では、子どもを主役にした授業改革に向けて、市全体で「自由進度学習」を取り入れ、市全体が実践コミュニティとなり取組を推進している。この状況を生かして、令和 6 年の 1 月に行われた小学校の公開授業を、全教員で参観する機会を設けた。保護者にも了解を得て、児童を給食後下校させての取組である。この機会のおかげで、今後の目指す方向がより明確になった。

現在、次年度に向けてよりよい学校運営となるよう準備を進めている。目指すところは、私の尊敬する「大村はま氏」の「優劣のかなたに」という状況を学校全体で生み出していくことである。また、自身が教員のときから目指していた「やればできる！」（スタンフォード大学キャロル・S ドゥエック氏提唱）のマインドセットや、非認知能力としてあげられている粘り強さにつながる「努力の大切さ」（フロリダ州立大学心理学部教授アンダース・エリクソン氏提唱）を実感できるような環境づくりを、日々の授業をはじめ、様々な取組により一人一人の子どもたちに体感していってほしいと願っている。

様々な研修を通して「子どもの学びは教師の学びの相似形」が、「教師の学びは校長の学びの相似形」

にフラクタルにつながっていること痛感した。この言葉を肝に銘じて、今後も大学院での学びを基に、日々子どもたちのために邁進していきたい。全ては子どもたちのために、全ての子どもたちのために。

「優劣のかなたに」　大村はま　氏（一部抜粋）

学びひたり　教えひたっている
それは優劣のかなた。
ほんとうに持っているもの
授かっているものを出し切って、
打ち込んで学びひたり　教えひたっている
そういう世界。
優劣を論じあい　気にしあう世界ではない。

ラウンドテーブル報告（参加者からの感想）

2 月のラウンドテーブルの各 Zone 及びクロスセッションの参加者からの感想文を掲載しています。

Zone A　学校

「子ども主体」の学びとは

独立行政法人教職員支援機構　長谷川　哲也

今回私が参加した Zone A は、「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」をテーマに、「チーム学校」としてのコミュニティの在り方を考える内容であった。私が所属する教職員支援機構では、教職員の「新たな学び」の実現に向けた取組を行っており、その根底には「子どもを主語」にした学びの実現がある。そうした学びの在り方を考える上で、「そもそも『子ども主体の学び』とはどういうことなのだろうか」ということを考えたいと思っていたため、少しでもそのヒントが得られればと思い、この Zone に参加した。

始めに、越前市立認定こども園服間の玉村美幸園長先生にご報告いただいた。この園では「合同保育」を行っており、未満児（1、2 歳）と以上児（3～5 歳）にクラスを分け、それぞれのクラスは異年齢の園児たちが一緒に活動を行っているとのことだった。異年齢で保育を行うことにはメリットとデメリットがあり、年下の子が年上の子に憧れて様々なことにチャレンジしやすい反面、年上の子が年下の子のお手伝いをし過ぎてしまうことで、各年齢で身に付けてほしい力が身に付かない可能性があるとのことだった。これを聞いて、「自立」について考えさせられた。確かに年下の子が自立できないことは問題だが、年上の子に「年下の子の自立を促す視点」を持たせようとすることも重要で、むしろそうした営みを通じて、双方の社会性が育まれるとも感じた。

次に、信州大学教育学部附属松本中学校の湯本哲先生に、学級総合（総合的な学習の時間）の取組についてご報告いただいた。生徒たちの希望を尊重した結果、テーマが細分化して学級がバラバラになってしまったため、一ヶ月半の話し合いを経て「井戸」と

いう一つのテーマに絞ったこと、そうした話し合いを経たことで、学級が一つの目標に向かって、仲間、地域、行政などとも関わり合いながら活動ができたことなどをお話いただいた。この報告を聞いて、「子ども主体」の意味や教師の役割について改めて考えさせられた。生徒がやりたいことをやらせるだけでは深まらない学びもあり、そこに先生が生徒たちに抱く「こうなってほしい」という願いを実現するための働きかけがあることで、学びが深まっていく場合もあるのだと感じた。

発表の後は、小グループに分かれて対話を行った。年齢や立場もバラバラなメンバーで、それぞれの視点から様々な意見が聞けて面白かった。それでも課題意識は皆共通で、対話の内容はやはり「子ども主体とは？」「教師の役割とは？」といった話となっていった。そこでは教師の役割について、「『気付き』を促すこと」「『みんなで協力したい』という子どもたちの想いを形にすること」「『学び方』を学ばせること」といった意見が出た。どれも本質に迫る考え方だと思い、大変興味深かった。

まだモヤモヤしている部分もあるが、このモヤモヤを大事にしながら、今回得た学びを踏まえ、これからも「子ども主体の学び」について考え続けていきたい。

初めてのラウンドテーブル

社会福祉法人愛慈福祉会 きたこども園　**水谷 友梨**

私は今年度、福井県幼児教育支援センター主催のリーダー養成研修に参加させていただきました。その研修の中で、『遊びの中の学び』や『学びのサイクル』について意識した実践事例を書いてきました。それを小グループで語り合い、遊びの中の学びを捉える目や語る力を高めようと学びあってきました。そんなリーダー研修最終日に岸野先生が「幼児期以外の実践をたくさん聞くことができる」とこのラウンドテーブルの事を紹介してくださり「今、私たちが大切にしている遊びの中の学びなどがこれから先どうなっていくのだろう…」と、とても興味が湧き、初めてこのラウンドテーブルに参加させていただく事になりました。

ZoneＡでは～子ども主体の学びを実践するコミュニティ～というテーマのもと２つの発表を聞かせていただきました。私自身がこども園に勤務していることもあり、同じ幼児教育の現場である認定こども園服間の玉村園長先生の発表を楽しみにしていました。玉村先生の「試行錯誤する中で子どもたちの興味が深まったり、やってみようという意欲に繋がったり、遊びのイメージが広がったりする」いう言葉が特に印象的でした。また、異年齢児が同じ空間で過ごしているという事で、子どもの姿をしっかりと捉えながら、『何のために？』『どう変えていくとより良くなるか？』など保育者の願いやねらいももちながら環境設定を丁寧に行っている様子が伺え、とても勉強になりました。

松本中学校の発表では、聞く前と聞いた後では今までの「学校の先生」のイメージが１８０度変わりました。湯本先生の「子どもは学びたいのだ。教師は子どもの『やりたい』を支えるために学びの見通しは持ちつつも一人の探究者として存在する」という姿勢が素敵だな…と思いました。また、「楽しいだけでは学びは深まらない」という言葉も心に響きました。認定こども園服間の玉村園長先生のお言葉とも繋がるのですが、今まで知らなかった人・物・事と関わったり、悩んだり、上手くいかない事をどうにかして乗り越えようとする経験があるからこそ学びは深まるのだな…と思いました。どちらの発表も子どもの主体的な学びを支えるために子ども・教師（保育者）・地

域の人々とチームになっていくことが大切なのだなと改めて感じる素敵な２つの発表でした。

セッションⅡでは校種など様々な先生方と小グループでじっくりと語り合いをさせていただきました。『学校の先生＝近寄りがたい』というイメージを勝手に持っていた私は、少し緊張しながらセッションに参加しました。しかし、グループの先生方はとても気さくで私の拙い保育の話も意欲的に聞いてくださいました。学校にはカリキュラムがあり、毎日十分な時間が取れない中で「どうしたら子ども達が学びたいと思えるのか？」「どうしたら子ども達の『やりたい』に寄り添うことができるのか？」など本当に一生懸命悩み、考えていらっしゃる事に驚きました。そして、素晴らしい先生方がいてくださる事に感謝しながら、私たちは安心して子ども達を園から送り出そう！と思いました。

普段の研修では保育者同士のグループ協議が多く、お互いの保育を見直したり、自分の思いを共有してもらったり、相手の悩みを聞いたりなど「分かる、分かる！」と想像できる範囲内の話でしたが、今回は学校の先生方がどんな思いや願いを持って授業をされているのか、どんな悩みがあるのかを知ることが出来、どれも新しい発見でした。また、このセッションでたくさんの気付きを得ることも出来ました。小学校でも中学校でも高校でも、やはり自分の思いを言葉に出せるか？自分事として物事を捉え、自らやってみたいと実行できるか？そしてそれを諦めずに実現に向けて試行錯誤する事を楽しめるか？が大切になってくるのかな…と感じました。そんな子が育つよう私たちが出来る事は、どんな発言も認め、受け入れ、子どもが見守られている安心感のもとで何度も挑戦することが出来る環境（物的・人的）を設定することだと思いました。「自分」をまるごと受け入れられる経験が自己肯定感を高め、大きな集団にも自信をもって入っていけるだろうし、「自分と違う相手や考え」も受け入れられるだろう。

そんなことを期待し、人間形成の土台を任されているという責任とやりがいを感じながら、また明日からの保育を楽しんでいきたいと思います。思い切って参加したラウンドテーブル。たくさんの刺激、気付きを得ることが出来、とても良い経験となりました。ありがとうございました。

Zone B　教師教育

凝り固まりが解れ、共通言語が見出せたラウンドテーブル

熊本県立宇土中学校・宇土高等学校　指導教諭　後藤　裕市

１．はじめに

11 月下旬、本校に訪問いただいた福井大学及び福井県教育機関の諸先生方との縁をきっかけに、初めて Session Ⅱ「B 学校教育」、Ⅲ「ラウンドテーブル」に参加をした。2 日間を通して、凝り固まったものが解れた心地と共通言語で語れる組織の強み、省察する視座の豊かさを感じることができた。

２．凝り固まったものが解れる心地

本校で SSH 主担当として 10 年、生徒を学問の入り口へ案内できるよう、探究活動のプログラムや理数科目の開発、探究型授業の推進を通して、大学や企業、研究機関、学会や研修会等と連携を拡げてきた。柔軟さを意識してきたつもりではいたが、1 日目、幼稚園から大学、企業の教育関係者を交えたセッションの割当を手にし、不安を抱いた。「何を話すのだろう？」。

いざ、セッションが始まると、自己紹介に続き、実践概要が丁寧に語られ、次第に「何のために実践しているのか」、教育の目的に目が向くようになる。手段と目的の混同から手段の目的化に陥りがちだが、教育の手段が違う、異校種、異業種と対話を重ねるなかで、「なぜ、探究をするのか」自然と自身の実践を振り返るようになる。生涯にわたって探究を深める人材育成に視点が拡がり、所属する中高の枠組で考える凝り固まったものが解された。

３．共通言語で語れる組織の強み

急激な社会的変化をもたらす予測困難な時代で、未来の創り手となる資質・能力を育むために、探究、個別最適な学び、協働的な学び、STEAM 教育、データサイエンス等、様々な教育の手段が話題になる度、教員の研修や学びの在り方に難しさを感じてきた。前述のとおり、教育の手段でなく、目的に目を向けた対話が実現すると、自然と共通言語で語れる関係性が生まれる。自ら学ぶ力、考える力など学習者を中心に据えた共通言語で対話を重ねると、不思議と立場の異なる教育実践も、発達段階に応じたもの、未来志向なものとして共感的な態度で受け入れられる。学習者を見取るうえで、共通言語で語れる組織の強みとその可能性を感じることができた。

４．省察する視座の豊かさ

探究活動の体制構築、評価方法及びガイドブック開発、職員研修の創意工夫、探究の「問い」を創る授業と称した探究型授業の推進等を振り返り、報告・発表や研修講師をする際には、端的に、結論や枠組に落とし込んできたことに 2 日目、ラウンドテーブルで気付く。数人の異校種の教育関係者間で、丁寧に、その場面を皆が想起できるように主観と客観を交え、肯定と否定も含め、教育実践による変容をとらえた一瞬を、時間をかけて語る様子に、実践と省察の深みを知った。

５．むすびに

ラウンドテーブルを通して、感覚的な例えにはなるが、生涯にわたる人材育成（高さ）と、共通言語で教育を語れる組織（幅）、学習者を見取る丁寧な実践と省察（奥行き）と、立体的に教育観が広がった感覚を抱いた。そして、20 年以上、実践と省察を重ねてきた福井県に敬意も抱いた。熊本への帰路で、明日からの教育実践のアイディアが泉のように湧きあがってきたのは、凝り固まったものが解れ、共通言語を見出し、豊かな実践と省察に触れた時間の賜物だと思う。貴重な機会を提供いただきました福井大学教職大学院の諸先生方にお礼申し上げます。

Zone B での学び

福井市社北小学校　**松並　千尋**

今年度、ラウンドテーブルに初めて参加しました。様子が分からないまま初日を迎えましたが、あまりの盛況ぶりに大変驚きました。

午後からの Session Ⅱでは、Zone B に参加しました。 なぜ Zone B を選んだかというと、勤務校では、烏滸がましくも研究主任をさせてもらっており、教師が協働し学び合える校内研修となるには、どうすればよいか学びたいと思ったからです。

前半は、特色ある学校運営をしている学校の取り組みの紹介を聴きました。話の中で、「中核教員に依存しない組織づくりがこれから取り組みたい課題だ」という言葉がありました。確かに、私の勤務校でも若い先生がどんどん増えています。これからの学校づくりで大切だと思ったのは、若い先生たちの意見も大切にし、学校運営に積極的に参加してもらうことではないか、ということです。一緒に働いていて感じるのは、若い先生は、意欲的で勤勉であり、新しい知識や技術を身に付けることに前向きです。また、私た

ち中堅以降の教員にはない技能もあります。これからの学校組織の在り方として、若手も中堅もベテランもそれぞれの良いところを活かしながら、チームとして協働していくことが大切だと感じました。

また、岐阜県の草潤中学校は、子供の多様性に合わせた教育活動やその強みを活かした校内研修を展開している学校です。紹介を聴き、斬新な発想をもった学校づくりも必要なのではないか、とも思いました。「校内研修高度化支援事業」のカンファレンスでも、これからの学校や教員の働き方に対して、「自らのバイアスを外す必要がある」という話を聞きましたが、既存の価値観にとらわれず、学校の実情に合わせて学校運営をカスタマイズしていくことが求められていると感じました。まさに、学校も多様化する時代です。

後半は、様々な校種・業種の方たちと話し合う時間が設けられました。ご一緒したのは、教育DX化をサポートするシステムを開発したいと考えているとある企業の方、そして探求学習に力を入れている学校の先生方でした。その流れから、探求学習を進めていくのに必要なことは何か、ということについて話題が挙がりました。その方たちとの対話の中で感じたのは、学ぶことの楽しさや学びたいという意欲をまず、もたせることも必要なのではないか、ということです。学習した知識や技能を用いることで、探求学習が深まります。でも、まず「学ぶことが好き」という気持ちがなければ、深い学びに向かうことはできません。毎日子供たちと相対している学級担任としても、校内研究を牽引する研究主任としても、今回の先生方の対話から、そのことを大切にしていきたいと強く感じました。

今回のセッションでは、学校運営に微力ではありますが関わっている中堅教員として、そして一人の教員として、自分はこれからどのように在りたいか再確認できました。最後に、対話から多くのことを学ばせてもらった、全国の熱意ある先生方、今回のラウンドテーブルを企画してくださった福井大学の先生方に感謝申し上げたいと思います。

組織・学校運営に関する一考

学校改革マネジメントコース２年/東京栄養食糧専門学校　金澤　敏文

福井大学大学院連合教職開発研究科学校改革マネジメントコース 2 年の金澤と申します。私は長期履修学生制度を選択していますので、3 年目を迎えるにあたり、これまでの実践を省察すべく実践研究福井ラウンドテーブル Zone B に参加したので、思い返し感じたことを記します。

限られた人的資源をどのように活用するのか、Zone B ではその前線に立つ「中核的教員」に対してそれぞれの役職者、或いは若手がどのように関わってきたのか報告をいただきました。このように中心を成す役割を持った教員が前に出やすい（出ようと思える）環境は、職場における心理的安全性の上に構築されるのだと理解できました。転勤など異動があったとしても、力強く歩んだ軌跡が学校に残り、脈々と引き継がれるのが理想的です。そして新たな「中核的教員」の道しるべになります。その一方で組織の序列を尊重し過ぎると余分な贅肉がつきまとい、新鮮さや高揚感が失われ結果的につまらないものになります。管理者は、要所における調整（チエック）と大幅に逸脱した場合の統制（是正）くらいにしておくのがよいと思います。このようなことから、管理者の資質には「我慢強さ」が求められ、これは組織マネマネジメントにおいて不可欠な要素だと考えています（ただし無関心はよくありません）。

次の報告においては児童の対話内容を集積し、データで処理をする。その結果をもって非認知能力を測り、客観的に評価する学習方法を教えていただきました。また不登校特例校における個別最適な学習

と生徒への配慮から安心を獲得するまでのプロセスには教職員の同僚性を土台としたシステム作りが不可欠であることを学びました。どちらの報告についても、「個別最適」をキーワードとした児童・生徒たちの能力に合わせた学びを展開していました。私は子どもたちの個性を経験的素養と捉え、これまでに備わった個々の能力を尊重するべきだと考えます。仮に、グループの活動において活発に発言する者（ワーカー型）、意見をまとめて方向性を示す者（リーダー型）、黙ってクループ内の顔色を窺っている者（観察型）とします。グループの意見がまとまり始めると、合意的空気に包まれて一気に決定事項となりがちです。ところが事前に観察型の発言を求めることで、より変化に富んだ良質な結果を得られることがあります。場合によっては消極的に映ることが多くアウトサイダーに分類されがちですが、盤上の展開をよむ能力、または横断的に物事をみる能力に長けているのかも知れません。こういった潜在的な能力を表面化させるためには、「ちょっといいかな。」と発言できる環境が担保されているべきであり、授業では教師、組織では管理職がその役目を担う必要があります。

人集団はでこぼこしているので、その丈に合った材料を提供できたり、主体的に選んだりできるシステムが用意されていて、我々は伴走しながら手を差し伸べたり、背中を押したり、担いだりして汗を流すことができる、それが「個別最適」ということなのだろうと考えています。

Zone C　コミュニティ

ラウンドテーブルに参加して

同志社大学生命医科学部医情報学科3年　齋藤　賢哉

Zone Cでは「持続可能なコミュニティをコーディネートする～世代や立場を超えたつながりの広がりは、どのように実現してきたのか～」というテーマのもと美浜町の探究学習の取り組みについて触れながら、世代や立場を超えたつながりは必要なのか、大切なのかについて考えました。平城 慶彦先生、行壽 浩司先生、吉岡 弘和先生による探究学習の活動の様子を伺い、小学校からの学びが、中学、高校の学びにつながっており、この教育方法を実践している美方高校の生徒のお話を聴いて、つながりのある学習が、生徒たちが社会で活躍するために必要な力を育てているという事を強く感じました。また、小グループでの話し合いで、私は平城先生の発表についての感想で、「この取り組みが成り立つのは美浜町の皆が地元愛にあふれていることが大きく関係しているので地元に戻って、就職する人が増えそうですね」と伝えたところ、平城先生は、「地元に残って社会貢献してくれることはうれしいことだが、どんな地域にいても社会参画できる人たちに育ってほしい」とおっしゃっており、生徒たちの成長を第一に考えた取り組みであるという事を感じました。小グループの後の全体の話し合いの中では、人とつながることについての話し合いを行いました。人とつながると様々な意見に触れることで自分の可能性を広げてくれるというメリットもあれば、周りの意見に流されてしまい、自分のやりたいことを見失ってしまうなどのデメリットも挙げられました。私は、つながりは大切なものであるという意見であったが、反対の意見を聞いて新

しい考え方でつながりについて考えることができました。

私は、大学在学中に教育について関心を抱くようになり、将来は教壇に立ち教育に携わっていきたいと考えています。関心を深め、将来に繋げるために今回のラウンドテーブルに参加させていただきました。私の大学での専攻は電子工学であるため、参加する以前は、教育学部以外からの参加は受け付けているのか、教育に興味があるという理由だけで参加してもいいのかなど、不安なことはありました。しかし、実際に参加してみると、様々な業界の方々が参加していており、疎外感を感じることなく、楽しくラウンドテーブルに参加することができました。様々な業界の人たちが、一つの課題に対して皆で意見を出し合い、討論し、多角的に課題と向き合うことで、自分の意見を他の意見と比較したり、共通点を見つけたりすることで、ブラッシュアップすることができました。これもまた一つの世代や立場をこえた繋がりであることを感じ、繋がりの大切さ、つながりのすばらしさを参加することを通して実感することができました。とても貴重な経験をすることができ、教育に向き合うモチベーションが上がり、この経験を今後のキャリアにつなげていこうと思います。

Zone D　International

Lesson study practice at M. H. Greeff Primary School in Windhoek, Namibia: Fukui University Round Table Experiences.

English Teacher at M.H.Greeff Primary School, Windhoek, Namibia

Uzuvira Tjomita

Lesson Study in Namibia

Lesson study practice in Namibia is a practice which educators in schools are not very familiar with. According to ‘’Lesson Study’’ N.D lesson study (or jugyō kenkyū) is a teaching improvement process that has origins in Japanese elementary education, where it is a widespread professional development practice The practice involves enhancing teachers’ skills through observing each other’s classes during lessons. This is done by analysing the lesson plans and outcomes. After the observation, they discuss the effects and issues of the lesson. Thus, in turn, they improve their lessons and build productive relationships with each other. As an English Second Language teacher teaching 5th grader who have gained meaningful insight into lesson study during my time at Fukui University in Japan, it has been a challenge implementing lesson study.

With this said I was honoured with the support of my school headmaster to start small during implementation of lesson study. The implementation was a success. With up to 2-3 teachers per session, With the sessions, my observation included:

- As a department head it was less challenging to have lesson study practice as teachers were obligated to practice and have the full cycle.
- Teachers would share teaching practices that would improve the learning in the classroom environment and the lesson study cycle was effective.
- The observation results would enable the supervisor to analyze the teacher’s classroom reflection forms,

incorporate them within lesson study, and use them as a strategy in lesson planning and delivery. To improve on policy practice, especially the COI Form (Classroom Observation Instrument for Teachers)

- In addition, as a classroom teacher teaching English second language to fifth-grade students as a teacher it is more challenging to practice lesson study as your manager in the department is less aware of lesson study as a teacher professional development strategy.
- Finishing the full cycle is a challenge. Due to time constraints. Reteaching a lesson is difficult as we must follow a term plan which is linked to the scheme of work directed by the Ministry of Education.

The number of teachers participating per session is normally 2-3. Post-reflection sessions last about 15-20 minutes.

There are 40 learners per class of which one period (Session) lasts 40 minutes.

Fukui University Round Table experiences: Fukui Roundtable Spring Session 2024, Zone D: International.

After participating as an observer in the previous Roundtable discussions, I presented at the spring session in 2024. The presentation was about my experiences implementing lesson study at my school. The presentation included a brief background on the school and the challenges of implementing lesson study. One of the challenges included being able to finish the full lesson study cycle as a supervisor/head of department compared to being a teacher. One of the takeaways of the roundtable was a video presentation which was presented to all the members of the roundtable. The video was a lesson about a weather report which I presented to fifth-grade learners. The video lesson had components of lesson study also included such as post lesson discussions.

The roundtable provided good exposure and opportunity for me as a presenter. I saw an opportunity to learn from my neighbouring counterparts how they perceive lesson study for those who were already exposed

to it and how the new members who would start learning about lesson study performs under the circumstances. In addition, the Japanese teachers who were part of the roundtable and facilitators provided valuable guidance on how to approach challenges and strategies to reach the levels of my learners and provide a conducive learning environment. In addition, I posed questions as to how I get my students to collaborate more, as this is one of the challenges that I face in the everyday classroom. The feedback I received has now provided me with more motivation to approach teaching and learning with new strategies every day.

A Reflection on the 2024 Round Table Reflection

Science Teacher of Dzenza CDSS, Malawi

Chanya Bertha

During this year's round table, I had the opportunity to present at the 2023 WALS conference and on the progress that I am making in the implementation of lesson study. I appreciate the opportunity because I was given a chance to connect once more with some individuals that I shared my experience with last year. This is because I took it as an opportunity for me to learn from other educators as I was having a whole different set of challenges at the new school where I am currently teaching.

When I shared the challenges am facing at the new school and my efforts not to give up, I was very encouraged because those who commented on my presentation indicated that they were impressed with how I was handling the situation. They were impressed by the fact that despite the challenges of the school administration not being interested in introducing lesson study, I was able to involve some members of staff by inviting them to an online presentation that I had.　They also appreciated the idea of inviting some colleagues from Malawi and Zambia as it indicated that I was taking lesson study to another level were by was taking it to other countries. This was very encouraging as it made me realize that what I am doing can have an impact even though I did not realize it myself.

There was also a presentation by Uzuvira Tjomita from Namibia in which he talked about how he successfully conducted lesson study at his school when he was acting head of the department. He also talked about how he faced challenges when the head of the department returned. This just confirmed that educators face similar challenges when implementing lesson study. It also confirmed my observation that the introduction of lesson study in an institution should begin with those in authority as it becomes easier to implement with support from them. Mr. Tjomita from Namibia demonstrated that lesson study can be implemented in any situation no matter how challenging as long as there is a will.

I would like to appreciate the idea of having roundtables because firstly, it gives us the opportunity to hear from our fellow educators and get encouraged by their challenges. With hearing about other people's challenges you get encouraged because you realize that you are not the only one facing challenges. Additionally, the round table presents an opportunity for us to appreciate our own work which we may not realize is good enough.

Zone E 探究

「あたりまえ」を考えること

福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 8年 林 和奈美

私は今回、運営側としてこのZone Eに参加させていただきました。この「あたりまえ革命 for schools」というテーマの狙いは、自分の生活を見直しより良い学校を自分たちで創り上げていく、そのためのヒントを見つけることです。時代が大きく動いている今の世の中において日常の「あたりまえ」になっている慣習やルールに疑問を持つことはとても大切なことであり、探究の第一歩になります。また、その過程によって本当に必要な「あたりまえ」への理解が深まったり、それらの価値づけにもつながると考えました。

「あたりまえ革命 for schools」にテーマが決まり、私たち実行委員は当日の流れを話し合いました。どんなところから話を始めるといいか、最終的にはどんなことを考えながら帰って欲しいのか。当日のことを考えながら、期待に胸を膨らませていたことを鮮明に覚えています。また、参加してくださった方々が楽しく、ざっくばらんに話せるよう、細かな言葉の表現や雰囲気作りにもこだわりながら話し合いを進めていました。

そうして迎えた当日のZone E。一つの会場には収まりきらないほどたくさんの方々が参加してくださいました。グループワークでは、それぞれの「あたりまえ」を共有し、考えを深め、最終的には理想の「あたりまえ」や、そのために必要なことを考えるという流れで進みました。

私が参加したグループでは特に、校則についての話題で盛り上がりました。学校がそれぞれ違うことで、校則の違いがよく見え、すごく興味深い話をたくさん聞くことができました。様々な視点から、それぞれの校則について話しているうちに、生徒の自由と自主性は深く繋がっているのではないかという意見がでました。つまり、むやみに学校が生徒を規則で縛りすぎると生徒の可能性まで縛ってしまうことになるのではないか、という考えです。確かに、規則が多いということは生徒の活動や行動が学校側によって決められている、つまり生徒が自分自身で考えて動く機会が少なくなってしまうということです。しかし、校則には生徒を危険から守るという側面もあり、それは絶対に必要な部分です。そこで、それぞれの学校が定期的に教師と生徒が対等な関係で校則について話し合う、校則を見直す機会を設けることが大切なのではないかという結論に至りました。

私は、この話し合いを通して改めて校則というものの重要さを理解することができました。納得のいかない校則にただ文句を言うのではなく、それによって自分たちにどのようなデメリットがもたらされているのか、どうするべきなのかを生徒も教師も共に考えていかなければならないと感じました。実際に自分たちの学校生活を考えると、企画していた時以上に「あたりまえ革命」と言うテーマの大切さ、面白さを感じることができたように思います。

今回、「あたりまえ」というものに疑問を持つことが探究の第一歩になることを改めて痛感しました。また、実行委員としても本当にいろいろなことを学ぶことができました。この経験を活かし、これからの探究的な学びに繋げていきたいです。

「あたりまえ」を通して

千葉県立保健医療大学　健康科学部　栄養学科　講師　鈴木　亜夕帆

私は、今回、福井大学で対面参加することができました。そして、2 月 17 日は Zone E：探究「学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える」に参加いたしました。

Zone E では、ワークショップ『あたりまえ革命 for schools』と題して、私たちの学校にある「あたりまえ」を見直してみませんか？というテーマで、学校の「あたりまえ」について約 50 グループに分かれて、グループワークを実施しました。各グループのメンバーの約半数は小学生から高校生で、子どもたちの参加が多いことに驚きました。普段は接することが少ない年代や立場の方とのグループワークなので、子どもたちはどう思っているのか、小中学校の先生はどのように思っているのかに興味があり、たくさん質問をしてしまい、本来の話し合いを邪魔してしまったかもしれないと反省しています。

ゾーン E に参加し、感じたこと、学んだこと、興味深かったことはいくつもあるのですが、その中の３つを記載いたします。

まず、グループワークのツールとして使用した、円形の書き込みできるボード「えんたくん」です。普段の授業では、話し合いの中でグループごとにミニホワイトボードを使用したり、付箋を使用することはありますが、新たなツールを知ることができました。「えんたくん」の場合は、参加者全員が書き込むことが可能で、文字や図の大きさも自由に表現でき、そのまま他のグループに共有し活用ができること、そして、机を準備しなくても話し合いが可能でした。とても良いツールを知ることができました。

２つ目は、「あたりまえ革命」の着地点です。どのグループも、あたりまえをテーマに様々な視点で深く話し合うことができており、それだけでもすばらしいことだと感じましたが、今の「あたりまえ」を整理し、おかしいと思えるものを変えていこうという流れで終わってしまうのだろうかと感じていました。しかし、グループワークの最後のテーマ説明で、司会の生徒さんから、「（良い）あたりまえをどの学校でもできるようにするにはどうしたらいいか」を、どんな壁があるのか、だれの協力が必要なのかを考える時間であることが伝えられたとき、良いと感じたあたりまえを広げることも「革命」となるのだと、自分の視点の狭さを反省すると同時に、前向きな気持ちで最後までグループワークを楽しむことができました。

３つ目は、改めて「あたりまえ」に気がつくのは難しいと感じました。例えば、授業で教科書を使用しないことが日常（あたりまえ）だったり、教科書を使用することが日常だったりすることを、両方のスタイルを経験した高校生のメンバーが説明をしてくれたことで、それぞれがイメージしているものが違うことに気がつくことができました。あたりまえに気がつく、変えよう・感謝しようと「言う」のはとても簡単ですが、気がつくためにはきっかけが必要であり、授業者として成長段階ごとにそのきっかけを提供するための様々な工夫をストックしていきたいと感じました。

福井大学のラウンドテーブルに参加させていただくと、毎回、色々なことを感じ、新たな視点に気がつくことができています。それは、大学で栄養教諭を目指す学生への授業内容を深められるだけはなく、管理栄養士専門科目の自分自身の授業展開を具体的にどう改善できるかを考える助けとなっています。教育が専門分野ではない私のような者にもこのような貴重な機会を開いてくださり感謝いたします。また、今回のラウンドテーブルを運営してくださった福井大学の関係者の皆様に感謝申し上げます。

Zone F　インクルーシブ

「福井ラウンドテーブル Spring Sessions 2024」に参加して

長崎県教育センター 指導主事　麻生　啓介

私は長崎県教育センターに勤務しており、教職員の研修を企画運営する業務に取り組んでいます。本県としても「新たな教職員の学び」につながるような研修講座について模索中です。今回、福井大学のラウンドテーブル（Zone F インクルーシブ教育）に参加しました。このような機会をいただき、この経験から得られた自分の気付きや今後への思いを記したいと思います。

私は、知的障害教育特別支援学校での勤務経験しかなかったのですが、今回のグループセッションで講師の体験に基づいた病弱教育への思いや幼稚園の実践発表を通して様々な方と考えを共有できたことで、新たな視点を得ることができ、さらに、これまで自分が大切にしていたことを再確認する機会にもなりました。それは、その子の「特性」をその子の「良さ」として捉え、集団で認めていくことが重要であることや一人一人の児童生徒が「存在意義」を感じられる学級、学校である必要があるということです。本研修会に参加した後、別の研修会で日本理化学工業株式会社（チョークを製造し、障害のある方を多く採用されている会社）の大山社長の講演を聞く機会がありました。その講演においても、「居場所」「存在意義」など今回のグループセッションで話題になった言葉が多く聞かれました。インクルーシブ教育について考えていく上で、大切な考え方の一つであると改めて感じました。また、研修を企画する側として、今回のグループセッションにおけるテーマ設定や話題提供（実践報告）の選定、ファシリテーターの声掛け、グループ設定の方法など参考になるところがあり、今後学んでいきたいと思います。

最後に、最も印象に残ったことを一つ挙げたいと思います。それは、ポスターセッションの中で、ジェスチャーを交えて、地域の課題を熱く語る中学生に強い衝撃を受けたことです。私はその中学生を見て、自分はこれまでの人生でこんなふうに人に話をしたことがない、なぜこの中学生はこんな熱く語れるんだと思わず足を止めてしまいました。聞いている人に「伝えたい」という思いが、言葉だけでなく、体からも溢れていました。この中学生は、学校でどのように過ごしているのだろう、どんな指導を受けたのだろう、これからどんな大人になるのだろうと様々なことを考えました。私は「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、研修を企画しており、自分なりに子供の姿をイメージしていましたが、このような中学生の姿が、まさに「主体的・対話的で深い学び」を体現しているのではないかと感じました。自分の取り組みたいことに挑戦するには、そのことについて調べ、理解し、何をすべきか言語化することが大切ではないかと思います。さらに、人に伝えるためには、自ら伝えたいことを整理し、相手に応じた言葉や表現を工夫して話さなければなりません。その過程で、さらに考えや思いを深めていくのではないかと思います。このような力は、すぐに身に付くものではありませんが、経験を重ねて、それが自信となることで、さらに意欲を高めた取組につながっていくものだと思います。

このような子供を育てるためには、私たち教師が変わらなければいけないと強く感じました。多くの先生方と関わることができる今の職場で、自分にできることに取り組んでいきます。

一人一人の世界を「つなげる」教師の関わり

高知県教育センター　坂本　恵

初めて実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただいた。２日間を通して感じたことは、「つながる」ことの大切さである。Zone Ｆインクルーシブ「『個』の視点から教育を再考する－子どもと教師の接面を探る－」では、子どもの世界をより深く知ろうとする取組として、二つの話題提供があった。

福井県立嶺北特別支援学校の桑島教諭からは、子どもと教師のそれぞれの視点から、病弱教育における教師の関わりについて共有いただいた。気持ちを共有できる患者同士のつながり、クラスの一員であることが意識できる前籍校とのつながり等、友だちとつなげ、結ぶという、大切な役割が教師にはある。このつながりが、病弱教育におけるインクルーシブであり、他者とつなげる教師の関わりが、入院中の児童生徒の他者に向かう力を育てることにつながっていくと強く感じた。

福井大学教育学部附属幼稚園の上田教諭からは、子どもの特性に寄り添いながら、子ども同士の関わりを積み重ねていった実践について共有いただいた。「特性はその子のよさでもあり、自分なりのこだわりを大切にしながら、集団の中で自分を解きほぐしていくことができるように」という上田教諭のお話が印象的であった。こだわりを大切にし、そのこだわりを友だちとつなげるきっかけにする、そしてスモールステップで自信を積み重ねていく取組は、集団の中でその子の存在を認め尊重していく、多様性の理解につながる取組であると感じた。

話題提供後のクロスセッションでは、少人数のグループで、インクルーシブをどう捉えるか、それぞれの思いや実践を共有した。様々な立場のメンバーであったが、みんなが幸せに過ごせるように、という共通認識のもと、共に考えを深めることができた。何に向かって対話するのかが明確であったため、必然性のある対話ができ、そのことが更に対話の深まりを生み出していったように感じる。対話を通して自分自身の考えを整理することができ、また、新たな気付きを得ることができた。何よりも、語りやすい、心理的な安全性が保たれた環境が大切であることを実感できたことは、貴重な体験であった。

インクルーシブな社会の実現には、多様性を理解し、一人一人を尊重できる子どもたちを幼児期から育てていくことが必要である。また、多様性を理解し尊重するためには、自分のよさや可能性を認識することが必要不可欠である。子ども一人一人のよさを生かしながら、安心して共に学ぶことができる環境をみんなでつくっていく、そのためには、一人一人の子どもの世界にアプローチし、子どもたちが自分のよさや可能性を認識できるように教師が関わっていくこと、そして多様な子どもたちをつないでいくことが重要であると気付くことができた時間であった。多くの気付きや出会いにつなげていただいたこの機会に感謝したい。

クロスセッション

安心して語り もやもやを持ち帰る

独立行政法人教職員支援機構 特別研修員　荻原 拓

「今までのような爽快感がない。ものすごいもやもや感とスッキリしない感覚がある。」今回のラウンドテーブルの率直な感想です。今回で福井ラウンドテーブルへの参加は４回目でしたが、このような感覚になったのは初めてでした。

私が初めて福井ラウンドテーブルに参加したのは７年前です。当時の私は教諭として中学校に勤めていました。自校の研究の関係で福井大学と繋がりがあり、研究主任からの割り当てにより参加することになりました。その時、「校内の枠がなければ僕が行きたいくらいだよ。」と言われた気がします。しかし、当時の私には長時間にわたって実践を語り合うのみというラウンドテーブルにどんな意味があるのか…。不安とある種の疑念をもって参加したことを覚えています。しかし、ラウンドテーブルを終えた後、なんとも言えない爽快感があり、次の実践へのエネルギーをもらって帰ってきました。それは、自分の取組や思いを十分に語り、それを聴き手の皆さんがじっくりと聴いてくださり、自分の取組を価値づけてくれる。また、自分では気付いていなかったことに、気付かせてくれるような対話があったからです。気付けば、自分が他の先生方に「ラウンドテーブルいいよ！」と参加を勧めていました。

今回のメンバーは、子ども園のＡ先生と高校のＢ先生。そして、中学校のＣ先生がファシリテーターでした。Ａ先生は、園内の先生方の学びを創っていく過程とその中での思い、ご自身の保育観の変容について語られていました。私も研究主任をしていた経験があり、Ａ先生の話を聞きながら、「あの時の自分は…」と自分自身を振り返りました。Ｂ先生は、生徒や先生の姿を基に、自校の探究活動への取組について語られました。現在の悩みや課題を素直に語られ、メンバーみんなでそのことについて語り合いました。解決方法を考えるだけにとどまらず、探究とはどういうことなのか、先生方の持ち味を発揮できるような探究活動とはどうしていけばよいのかなど、ここでも自分自身が考えさせられたり、私自身が次に生かしたいと思うことを見つけたりできました。他の方の話題提供から自分自身もじっくりと考えたり、新たなことに気付いたりするできるところがラウンドテーブルのよさだと思います。

さて、自分の発表です。今回お話ししたことは、教職員支援機構での１年間の経験と学びについて語りました。が、話があっちに行ったりこっちに行ったり。自分でも整頓がつかない中で話をしていることに気がついていました。今、この文章を書くにあたり、自分を振り返ってみると、前回までは自分なりに経験や思いを整頓して言語化し、伝えることができたのだと思います。しかし、今回は自分の実践やその時々の思いや気付きを整理しきれていなかったと感じています。今年度、昨年度までの十数年の教諭としての立場から、教職員支援機構の研修員として、研修提供者として立場が変わりました。大きな変化とともに１年間で多くの学びの機会をいただき、その中で多くの価値観に触れたり、これまでの実践について立ち止まって考えてみたりすることが非常に多くありました。その一方で、ある意味、情報過多になっており、また、いろんな変化や新たな気付き、それらと自分の矜持との葛藤が多くあったように感じます。

それでも、聴き手のお二人の方はじっくりと私の話を聴いてくださり、ファシリテーターの方は質問をしてくださったり、新たな気づきを促してくれるような声がけをしてくださったりしました。「何を語っても大丈夫」という安心感があったからこそ、素直に自分を語ることができ、「今の自分」を改めて認識できたように思います。もやもやだらけで福井の地

を離れましたが、次へ向かおうというエネルギーはしっかりいただきました。実践を重ね、また福井に語りに来ようと思います。

繋がりと学びの軌跡
～健康教育を通じた多世代交流の実践～

新潟大学　現代社会文化研究科　山﨑　幸歩

福井大学連合教職大学院の山浦先生からのご紹介を受け、ラウンドテーブルに 2 年目の参加となりました。このラウンドテーブルでの経験から、語り合う場があることの素晴らしさを感じます。実践者はそれぞれの想いを持ちながら子どもたちと向き合い、工夫を凝らし、実践し、そして記録をし、さらに語り合うことで、そこにいる他者と共に考え、深みが増していくことを学びました。今回も日本各地での様々な教育活動や考えに触れ、多くの学びを得る貴重な時間でした。

一番印象に残った学びは「子どもの中に芽生える想いを大切にすること」でした。自分がこれを伝えたいという想いも大切ですが、そのきっかけや働きに対して子どもたちがどう考えて行動するのか、そこから大人は共に学び合う存在であることが重要でした。

2 日目に参加したグループ活動では、「動物飼育を通して学ばれるものは何か」というテーマで、長野県の小学校教諭 A 先生の発表を聞きました。

ヤギの飼育を通して、ヤギの成長から子どもが考えた言葉やそのプロセスを丁寧に考察されていました。出産までのからだの管理、角をとるのかとらないのか、名前は何にするのかなど、様々な出来事や瞬間を子どもたちと共に考え、話し合いながら学びを深めていました。特に印象的だったのは、掃除をしている 2 人の子どもと先生のやり取りでした。みんなで責任をもって掃除することを求めた先生の想いに対して、子どもは「ヤギといる子たちはヤギと仲良くなりたいんだよ。みんなヤギのために行動しているからいいんだよ。」と返してきたといいます。大切なヤギのために他者と想いを共有し、ヤギを想うもう一人の自分との出会いによる多声性の中で自己形成が図られていくことが、学びの時間の核心であるということでした。

現在、私は大学院で学びを深め、新たな挑戦に取り組んでいます。

『PARTY 体操』というタオルを使った体操プロジェクトを各地で実践し、地域の繋がりを生み出し、健康に向かう仕組みを考えてきました。ここで重要になるのは、関わる人たちが楽しみながら取り組むことです。このプロジェクトは、大学と企業が産学連携しながら作り上げています。楽曲の担当は数々のヒット曲を生み出す音楽プロデューサーと音楽アーティストがタッグを組んで作成しました。また、体操に用いたタオルは、日本の伝統工芸の技術を用いてタオル会社が制作しています。体操は大学生が考案し、子どもから高齢者版まで各世代に楽しんでもらえるようにシリーズ化しています。地域で活躍する健康運動指導士の方のご紹介から、新潟市運動普及推進委員会向けに研修会の依頼も受けています。1 人では作り上げることができないものも、多くの人がそれぞれの想いで関わることで大きなムーブメントになることを学びました。そして、そこに欠かせないのは、繋がりの中の信頼関係です。互いのことを知り、一緒に活動したいと願い、目の前のゴールは異なってい

ても向かう先が同じ方向であれば交わりあい、協力し合えるということです。

今回ラウンドテーブルでの問いかけ、「世代や立場を超えた繋がりの広がりはどのように実現されていくのか」に対して、私は、それぞれ関わることができるきっかけを見出すことが重要だと考えています。何かをきっかけにして、繋がりや関わり合いを深めることで、このような広がりが実現されていくのだと思います。

健康教育の視点から、私は今、この体操を通じて人々と繋がり、世代や人種を超えて共に未来を築いていきたいと考えています。今回も素晴らしい学びの機会を共有できて大変感謝しています。ぜひまた参加させていただきたいです。

☆妙高市イベントでの PARTY 体操実施の様子

教職大学院での学びの省察（ラウンドテーブル）

ゆっくりと着実に変容していく

授業研究・教職専門性開発コース 1 年/岐阜聖徳学園大学附属小学校　松河　圭亮

2 月 17、18 日のラウンドテーブルは、私にとって 4 回目のラウンドテーブルである。しかし、今までは聞き手としての参加であり、話し手として参加するのは今回が初であった。そんな中、私は長期インターンシップの 1 年目のまとめとなる私自身の変容について発表した。2023 年の 4 月から不安と期待を胸に秘めて始まった長期インターンシップでは子どもや先生との関わり、日々の生活、授業実践等で様々な出来事があった。しかし、このような出来事を立ち止まって振り返り、自分の言葉で他者に伝えられるようにまとめる機会は時間が取れなかった。だからこそ、今回のラウンドテーブルは自身の経験を振り返られる非常よい機会であったと考える。

岐阜拠点では毎週木曜日に週間カンファレンス（通称木カン）が設定されており、その時に使う資料として各週のインターンシップの報告書を書き留めている。今回、1 年を振り返るにあたりこの報告書を読み解いていった。30 週分以上ある報告書を読み解く中で、「叱り方」「子どもとの関わり方」「授業」において変容していることに気付くことができた。中でも「子どもとの関わり方」についてでは、子どもが何を考えているのかを考えて、関わることが大事であるが、子どもにとってよかれと思ったことがそうではなかったというエピソードを語ったが、聞いて下さった現役の先生方も同じような経験をしているというコメントをいただいた。教師が子どものことを分かったつもりになってしまうことは危険な状態であり、子どもの様子から「こんなこと考えているに違いない」と決めつけるのではなく、子ども自身の気持ちをしっかりと聞き出すこと大事であること学べた。また、「甘やかす」と「支援」の違いについて

考えさせられた。子どもとの関わり方で 4 月当初は「何でもやってあげる先生」だったのが「子どもができることは子どもにやらせる先生」に変容したというエピソードより、「甘やかす」と「支援」には違いがあり、それはその子の成長になるかどうかであるというコメントをいただいた。このコメントで、子どもにどこまでやってあげればよいのだろうと抱いていた悩みが解消された。今後も子ども考えを引き出し、子どもの成長につながる支援をできるように心がけていきたい。

また、今回のラウンドテーブルでストーリーを残していくことに大切さを実感することができた。今までは気にしていなかったが、書きためてきた報告書は出来事(ストーリー)と自分の感情や気付きについて残してきた。ストーリーをそのまま残してあるので、子どものイメージを鮮明に思い出すことができた。さらに、話し手として報告書を言語がする際に、ストーリーがあることで自分が思っていた以上にすらすらと語ることができた。本で学ぶ勉強以外にも経験をストーリーとして残し語ることで自身の学びにつながることを理解することができた。

初めて話し手として参加したラウンドテーブルであったが、思っていた以上に語り続けることができ、非常に晴れ晴れしい気持ちで終えることができた。そして、私自身が長期インターンシップで少しずつであるが経験を経て、変容しているということに気付くことができた。これからも、長期インターンシップで経験を積み、ゆっくりと着実に変容できるように学び続けていきたい。

ラウンドテーブルでの学びの面白さ

ミドルリーダー養成コース 2 年/奈良女子大学附属幼稚園　**辻岡　美希**

年に 2 回の福井ラウンドテーブルに参加するようになって丸 2 年がたち、これまでオンラインも含めて5回参加させていただいた。初めて参加した時は、聴き手として参加し、異校種の方や行政の方のお話を吸収しようとしていたが、発表者として参加させていただくようになり、回を重ねるごとにラウンドテーブルの面白さを感じるようになってきている。

今回、1 日目のゾーンセッションでも、2 日目のグループでも、全国各地から来られた、校種も立場もバラバラな方とグループで出会うことができた。しかも初めてラウンドテーブルに参加される方が多く、研修のあり方としてラウンドテーブルが普及してきていることを肌身で感じることができた。

特に印象に残ったのは、2 日目のラウンドテーブルだった。発表は、学級経営にソーシャルスキルトレーニングを取り入れている小学校の先生と、ICT を活用し、主体的・対話的で深い学びを生み出すための授業改善を学校全体で行っている中学校の先生と、私の長期実践研究報告書についての報告だった。

それぞれの先生の取り組みは興味深く、自分の実践にも取り入れられそうな部分もあって、とても参考になった。例えば、わかりやすいソーシャルスキルを提示したり、ロールプレイをしたりすることで、学級の中で落ち着かない子どもたちにも具体的にどう行動すればよいのかがわかりやすくなるし、周囲が落ち着くことで刺激が減り、落ち着かない子どもも過ごしやすくなるという考え方は、明日からの保育に取り入れたいと考えた。また、ＩＣＴの活用に関わっての校内研修が、それぞれの先生の関心をもったテーマからグループ分けをして行われていることに、研修のあり方を改めて考え直すきっかけとなった。

全く異なる 2 つの発表において、私が共通点を見出したのは、それぞれの先生が大事にしようとしている、課題に対して当事者意識をもって取り組む姿勢をもてるようにしたいという思いだった。ソーシ

ャルスキルを身につけることで、自分が授業にどう参加していけばよいのかをそれぞれの子どもに考えさせようとしていることや、研修したいことをそれぞれの先生が考えて参加することで、「させられるもの」ではなく「主体的に取り組むもの」としての研修のあり方を目指していることは、主体的に学ぶ場を設けることで、児童や教員が自ら参画しようとする姿勢を支えたいと考えているからであろう。

私の長期実践研究報告は、教職大学院や園内での対話をとおして、自らのこれまでのあり方や保育への向き合い方を見つめ直し、自分が自分として生きるとはどういうことか、主体的に学ぶとはどういうことかを考えてきたものである。

これまで子どもの声なき声に耳を傾け、ともに保育を創っていくことを目指してきた。教師と保護者との関係においても、教え教えられる関係ではなく、ともに子どもを支える関係をつくりたいと考えてきた。その中で感じたのは、保護者の中にも教育について話したい、深く考えたいと思っている人がいるということだった。保護者が多様な人との対話によって自分自身と向き合う場を設けたいという思いから、教師とともに創る保育参加や保護者同士の対話の場を設ける実践を行ってきた。

私がこれまでの実践で大事にしてきたのは、子どもと、同僚と、保護者と「ともにある」中で、それぞれが今できることを考え、自ら参画していくことである。そこには目の前にある課題や活動を自分事として捉え、関わっていこうとする姿勢が大事になってくる。それは、教職大学院で学ぶ以前には私に足りていなかった部分でもある。指示されたことを忠実にこなすことが仕事であり、与えられた情報を取り入れていくことが学びだと考えていたかつての私から、自ら問いをもち、自分が何を大事にしているのかを見つめ直し、実現に向けて行動していくことの面白さを感じられるようになったことで、Co-Agency というものが、実感として捉えられるようになってきたように思う。

幼児教育において大事にしようとしていることが、小学校でも、中学校でも同じように大事にしようとしていると感じられたことで、教育全体の方向性を感じることができて勇気をもらった。こうやって、校種を超えた広い視野で考えられることがラウンドテーブルの良さである。１日目の改革特別フォーラムでも話されていたように、多重な分散的コミュニティでの学びが、実践を進化させていくことを支えていく。異校種や企業を含めた、教育に関心がある人々との関わりを意識的に持っていきたい。

ラウンドテーブルの最後に「２年間で一番変わったと思うところはどこですか？」と問われた。私の口から出てきたのは「自分の考えを自分の言葉で話せるようになったことです」ということだった。自分の言葉をもつ…当たり前のようで実はとても難しく、しかしとても心地よいことであるということを感じられるようになったのは、ラウンドテーブルをはじめとした対話があったからである。借り物の言葉ではなく、自分の言葉で話すことで、自分の考えが再構築されていく面白さを感じ続けるために、教職大学院修了後もラウンドテーブルに参加できることを楽しみにしている。

ラウンドテーブルの醍醐味

ミドルリーダー養成コース２年/静岡市立清水桜が丘高等学校　小泉 真由子

教職大学院へ入学をして２年、院生としては最後のラウンドテーブルに参加した。今回は何といっても、生徒が一緒だったことで、これまでとは違った二日間となった。初日、三年間クラスで共に過ごしてき

た生徒 2 名がポスターセッションに参加した。発表は、これまでの学校生活や活動を振り返ったことで気付いたこと、奈良と静岡で開催されたラウンドテーブルを経験し様々な学びの価値に気付き始めたことだと聞いていたが、私は本番で見てほしいといわれ練習は見ることがほぼできなかった。当日、発表する姿を見て、二人が語る言葉一つ一つとその豊かな表情、教室では見られない姿に感動をした。そして発表の中で語られた内容は、私が教職大学院で学んできた「価値観の共有の必要性」と、そのために必要な「対話の重要性」、題名は「つながり」だった。その内容に驚いたと共に嬉しかった。正直、私は二人をポスターセッションに参加をさせることに悩んでいた。うちの生徒ができるのだろうか、周囲と比べ、活動内容が浅いのではないか…と。しかし、その私の考えこそが生徒たちの学びの領域を学校という枠で留めてしまっていたのだと、彼らの発表を見て思い知った。二人の成長から、教師は生徒の未来の新たな道を創っていくことができるのだと、改めて実感することができた。様々な活動に参加をさせて良かったと心から思った。

また、毎回のラウンドテーブルで私が最も学ぶことができるのが、様々な方々と出会い、語ることができるクロスセッションの時間だ。初日は、午後のSessionⅡでゾーンBに参加し、学び合う学校づくりのために取り組んでいることについて語り合うことができた。私自身が直面している組織づくりについての現状と課題、自分の困り感を話し、その場にいる方々から意見を頂けたことはとても新鮮であり、現在の「私」を客観視できる時間となった。そこで話された印象的だった言葉がある。それは「対話って本当にいいの？」「対話を辛く感じる先生もいるのでは？」ということだった。確かにその通りだ。対話をしんどいと思う先生も必ずいるのだ。私は、職場の対話のない世界をどうにか改善したいと研修計画を立て奮闘している最中だ。しかし、他者と関わることを苦手とする人がいることを忘れてはいけないのだと思い知った。必要だから、良いことだからと走り続けるのではなく、立ち止まり周りを見渡すことが大切だ。様々なケアができてこそ、他者を尊重することができ、「対話」が成立するのかもしれない。クロスセッションでは、いつも新たな気付きを得ることができ、同時になぜか職場で話すことができない自分の気持ちを素直に話すことができている。それは翌日のクロスセッションも同様だった。

二日目のクロスセッションでは、M2 として長期実践報告について発表をした。どんな人たちとの出会いがあり、どのような時間となるだろう、クロスセッション前にはいつもそんなワクワク感でいっぱいとなる。二日目のこの時間は、本当に楽しかった。あっという間に過ぎ去った時間の感覚が、クロスセッションの価値を物語っていた。4 人それぞれ違う立場で、違う場所で学びについて考え、悩み、課題を見つけ、その課題に向き合いながら活動していた。そしてその共通していたことは、学びの中心には「生徒」がいた。向き合って語り合った 4 人が、どんどんと中心へと近づきながら休憩時間も忘れ話していた。それぞれが語り手に耳を傾け、心で聴き、真剣に考えていた。だからこそその安心感から、私は自分の発表の際も、長期実践報告書についてありのままに語ることができたのだ。語り合う「場」の在り方を体感した。

二日間のラウンドテーブルがあっという間に過ぎた。多種多様な視点を持つ環境の違う方々と出会い語り合うことがいかに刺激的なのかを実感することができた。そしてラウンドテーブルの時間から「聴く」「語る」価値を改めて見出すことができた。これまでは他者との違いに気付くことで、無意識に自分の考えに蓋をして物事の本質に関わることを避けていた自分自身だったが、教職大学院で学び過去の自分を振り返りながら自分の実践を改めて見直していくことで、その意味づけをし、価値を考え、多くの学びを得ることができた。そしてその学びを、ラウンドテーブルという貴重な場で改めて語ることで実に深い学びとなっている。このような時間を職場で創り上げていくためにも、今の私にできることを常に立ち止まりながら、焦らずに考えていきたいと思う。そしてこのラウンドテーブルという貴重な経験を礎として、この先も新たな実践に挑戦をしながら学び続ける教師でありたいと思う。

私にとってのラウンドテーブルの意義

学校改革マネジメントコース１年/横浜市立東汲沢小学校　丹羽　正昇

福井大学にお世話になる前に、一度だけラウンドテーブルに参加したことがある。そのときのことを正直に話すと、自分のことをある種赤裸々に話している感覚に襲われ、話してしまってから妙にくよくよすることがあった。もっと別の言い方があったのではないか、あんな話をしてしまったけれど大丈夫だっただろうかなど、気になることの中心はいつも自分。いまにして思えば、自意識過剰だと言わざるを得ない。そんな状態であっても他の人のお話を聞いているのは、なんだか心地よく、学びが多かった。特に心地よいというのは、自分にはありがたかった。それまでの私は、どちらかというと人の話を聞くのが苦手だと思い込んでいたところがあった。聞くよりも話すほうが好きという感覚。ひょっとしたら教師あるあるなのかもしれない。ただし、話すほうが好きと言っても、まとまりのある上手な話はできない。きっと話すというよりは、おしゃべりが好きということだったのであろう。そんな私が、ランダムに(本当はよく考えられて)組まれたグループ内で、メンバーの話を聞いているのが心地よかったのである。お話しされている方の話が、(失礼な言い方になるが)必ずしもうまいというわけではない。それでも心地よい。どうしてなのか。実のところ、教職大学院に入るまでははっきりと分からなかった。

教職大学院に入学し、ラウンドテーブル形式でのセッションを重ねていくと、心地よさの正体にたどり着くことができた。その正体は、まるで話をしている人に同化している(もしくは追体験をしている)状況だったのである。自分以外の人のこれまでの人生や経験、体験、今後の夢や目標をお聞きしているうちに、自分ではとても経験できないことや思いつかないことが、あたかも自分のことのように思える錯覚。これが心地よさに繋がっていたのである。自分の世界が広がったというのか、見方や考え方が変わったというのか、とにかくセッションするたびに豊かになる自分がいることに気付いた。

私は校長になってからというもの、常々思っていたことがある。アウトプットすることは多いが、インプットすることが少ないと。インプットの手段としていたのは、研修に参加したり本を読んだりインターネット上から情報を得たりということが主で、人の話を聞くというのは、あまりなかったように思う。もちろん校長だから、職員の話を聞いたり、地域の方の話を聞いたり、保護者の話を聞いたりする機会はそれなりにあった。研修に参加し、講師の話を聞くこともあった。しかし、ラウンドテーブルのそれとは何かが違った。おそらくは、自分が同化するとか追体験するとかなどができない話では、私の場合、心地よさが湧き上がってこないのだろう。

人に歴史ありとは使い古された言い回しかもしれないが、人の生きてきた過程の一端を垣間見ることの尊さは、そのまま人への尊敬の念に通ずると思う。ラウンドテーブルにおけるセッションには、たぶんそういった感覚が含まれている。改めて思い返してみると、私は意識して人の歴史に触れようとしたことがなかったのかもしれない。そう考えると、いままでずいぶんと損をしてきたと思う。人の歴史に触れるように話を聞いていくことは、校長職にあるいま、たいへん役に立っている。人の話を聞く際に、その人の経験や体験を今後進む方向性と合わせて聞くことができるようになったからだ(もちろん差し支えない範囲でではある)。すると、ただ聞いているだけでは得られないであろう、その人の像がどんどん立体的になってくるのが分かる。そうなってくると、毎回ではないが、その人のこれからが、具体的に想像できたり思い描けたりできるようになる。そして、何よりもありがたいのは、自分と重ねたり比べたりして聞いているものだから、自分のこれからも思い描けるようになるのだ。これは、私にとって新鮮な出来事であった。そして、他の校長はいざ知らず、私が校長を続けていく上では、どうしても必要な力だとも思った。いつしかラウンドテーブルでのセッションは、

「聞く力」を養う場になっていたし、貴重なインプットの機会ともなっていたのである。

二日目のセッションでの話。福井県の美術教育における「自由を希求する」という言葉が、私には強く心に残った。ひょっとしたらこの言葉は、福井に限らず美術教育全般で語られるものなのだろうか。勉強不足の私にとって、まずはそれを確かめることが必要だったのかもしれない。しかし、そのことよりも福井における「自由を希求する」教育という言葉のインパクトのほうが、はるかに強く響いたのである。

「希求」とは、強く願い求めるという意味であるから、自由であることを強く願い求めるという教育の姿勢は、これからの学校教育に求められていること、そのものである。というよりも、むしろ従前より学校教育は、「自由を希求する」ものであったというほうが妥当であろう。この自由というものの解釈が何たるかについては、多くの議論がこれからも続いていくのであろうが、それでも学校教育の原点を示す言葉であるのは間違いない。子どもたちが自由に己の心象を表現し、それを互いに理解し合おうとすることは、まさに個別最適な学びであり協働的な学びである。

私が「自由を希求する」という言葉から、このような思いに至ったのには理由がある。昨年 12 月末に、中央教育審議会初等中等教育分科会の義務教育の在り方ワーキンググループから出された中間まとめを読んだことが大きい。主体的・対話的で深い学びが実現されていく中で、今後ますます何ものにも縛られることのない、自由な世界で学びたいと願っている子どもたちが増えると思われる。そんななかにあって、今ある学校は果たして子どもたちに選ばれるのであろうか。教科等の学びにしても、私が専門にしている国語科であっても例外ではなく、それを学ぶ意義を納得させられるのだろうか。近頃、そんな不安に襲われることが多くなった気がする。大人たちがよかれと思って作った今ある枠組み（学校、教科等、日課表など）について、いま一度、真剣に考えてみる必要がある。こんな気持ちになったのも、ラウンドテーブルでセッションした方々がいたからであり、聞くことにより学んだ成果である。ラウンドテーブルは、人の育ちを確実にサポートし、人を豊かに、心地よくする強力な手法の一つだと思った。

ラウンドテーブルでの学び、教職大学院での学び

学校改革マネジメントコース１年/滋賀県彦根市立城東小学校　平中　理恵

福井大学連合教職大学院で学ばせていただく２年間の内、１年目が終わろうとしています。「先生方が自ら学ぶ学校、そして、子どもが自ら学ぶ学校を目指し、私も教職大学院で学び続けたい。」という思いをもち、１年間を過ごしてきました。この２月のラウンドテーブルでは、発表をしてくださった方、クロスセッションで同じグループになり実践を語り合った方など多くの方から、多くの刺激と学びをいただき、２年目にチャレンジしてみたいことが少しずつ見えてきたように思います。

特に学びが大きかったと感じるのは、クロスセッションです。クロスセッションを通しての学びには、２種類ありました。

１つ目は、クロスセッションに向けた準備での学びです。具体的には、資料を作成することを通して、１年の中で自分自身がどのようなインプットをし、それに対してどのように考え、何をしたか、その結果がどうであったか、ということを改めて振り返り、整理できたことです。毎月のカンファレンスや夏期および冬期の集中で学んだこと、書き溜めたものを改めて読み直し繋いでいくことで、点であった自分自身の取組やそこでの思いが少しずつ線になってきたように思います。そして、書き溜めていくことの大切さを実感することもできました。

２つ目は、クロスセッションの時間の中でのものです。例えば、私はまだまだ自校の先生方を「巻き込め」ていない、と感じていたことに対して、「報告の中にある、学校の先生方の姿を聞いていると、十分に巻き込まれ始めているのではないか。」とコメントをいただきました。それを聞いて私は、ハッとしました。「巻き込む」ためには、先生方のことを知らなければならない、という思いをもっていたのに、先生方のことをちゃんと見られていなかったのではないか、と感じたからです。ラウンドテーブルが終わって少し経った今、改めてこのことを考えると、その瞬間に感じたこと以外にも、「同じ姿を見ていても、違う見方があるのだ。」という思いも頭に浮かんできます。語り合うことは、新たな気付きを得ること、つまり、自分にはない視点から見た、物事・事実の新しい姿が見えるようになることだということを、改めて、そしてより強く感じることができました。

私にとって、この２つの学びが、教職大学院１年目の学びの根幹だと感じています。書き綴り、読み直し、綴り直すという一連の営み、それを基に語り合い、多様な視点を得て、さらに捉え直し綴り直す。このように何度も思考をたどり直し、捉え直す中で「次」が見えてくる。私の中で、そういったことがラウンドテーブルで、そしてこの１年間で起こっていました。

来年度もこのような学びを積み重ねていきたい、そして、願わくは、それを学校での取組にも取り入れ、一緒に楽しんでくれる仲間を学校で増やしていきたい。そんな思いを強くもっています。

再スタートの2月ラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース２年/越前市吉野小学校　**武藤　基彦**

再スタートその１

今回のラウンドテーブルは私にとって再スタートになりそうです。教職大学院２年目の２月ラウンドテーブルでは長期実践研究を発表することになっていました。いまいち自分の取り組みに自信がもてない私にとっては不安しかありませんでした。けれど、グループのメンバーの先生方は、私の拙い発表を真剣に聞いてくれ、共感してくれたり改善案を出してくれたりとあっという間の１００分になりました。なぜ、あっという間だったのかといえば、メンバーが耳を傾けてくれたり、自分だったらこうするというアドバイスを出したりしてくれたからです。すごく安心しました。そこで、立ち止まって考えてみました。それは、職場での先生方同士の話し合いがラウンドテーブルのように、「受け入れてもらえる。」といった心理的な安全性が確保されているかということです。月々のカンファレンスやラウンドテーブルでのクロスセッションの仕組みを職場に取り入れたいと思い、実践を積み上げてきたわけですが、仕組みは確かに大切です。が、やはり、やってみようとする意欲や協働して学び合おうとする心をどう先生方に育んでいくかがもっと重要なのかもしれません。意欲や心は人によって様々なので、学び合うコミュニティづくりを難しくしているのは、そういったことが原因なのかもしれません。４回のラウンドテーブルに参加して、コミュニティづくりの難しさをますます感じます。けれど、これからの学校には絶対に必要です。難しさを受け入れつつ、先生方と協働して学び合うコミュニティを作っていかなければと決意を新たにしたという点で再スタートその１です。

再スタートその２

自分の発表だけでなく他の先生方の発表にも大きな刺激を受けました。ある高校の若い先生の発表でした。国語の授業を子どもたちに楽しく学んで欲しいという思いがとても伝わってきました。そして、理論を基にして実践してみる。そして改善点を見いだ

してよりよい授業にしていく姿が発表からよく分かりました。そういった若い先生の意欲や思いをくみ取り、どうサポートしていくとよいのかを考えながら発表を聞かせていただきました。教務主任となり授業に対してそれだけの熱意をもてているだろうかとも考えました。若い先生たちをサポートしつつ、私自身も授業づくりを楽しむといった姿勢で授業研究できたらと思い。職場もそのように変えていきたいと思えたという点で再スタートその２です。

再スタートその３

さらに、同じ年代の先生の発表はある意味衝撃でした。今の私はやるべきことが多すぎて、流れ作業のように仕事をしてしまっています。けれど、その先生の発表は、同じ年代とは思えないほど情熱的でエネルギッシュでした。今の私はそういった気持ちを忙しさにかまけて忘れてしまったのかもしれません。もう一度、その先生のように何事にも全力投球でやってみようと思えました。そして、ラウンドテーブル後、その先生から電子メールをいただきました。同じ年代としてがんばっていきましょうという内容でした。大いに勇気づけられました。これからの取り組みに勇気がもらえたという点で再スタートその３です。

また参加してみよう

教職大学院の学びは、月々のカンファレンスやラウンドテーブルでは語り合う仲間がいるので不安はないですが、現場での実践は孤独になりがちで不安になります。けれど、ラウンドテーブルで、若い先生の意欲を感じたり、同じ年代の悩みや思いを共有したりすることができました。そうすると自分の歩みがよかったか悪かったかは別にして、何か認めてもらえるような気になります。それが、次の歩みの力となります。院生としての参加は今回が最後となりますが、これからも機会があればラウンドテーブルに参加したいと思っています。

行動を鼓舞する環境づくり

学校改革マネジメントコース２年/沖縄県教育庁宮古教育事務所　**本村　税**

福井ラウンドテーブル開催１週間前に長期実践研究報告書を提出し終え、達成感と安堵感で、参加前までは幾分か浮き足立っていた。しかし始まってすぐに新たな気づきと学びに出会い、身が引き締まる思いをした。今回のラウンドテーブルではZone B（学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成）に参加させて頂いた。

実践報告１では山形県有数の進学校である県立山形東高校須貝校長から、探究科の設置を通した教育課程の再編と教師組織のマネジメントを含めた学校改革に関する事例が紹介された。それまでの教師主導の指導から、生徒の探究活動を通した生徒主体の指導への転換によって、「大学進学の手段として、一般入試からAO入試（総合型選抜）へチャレンジする生徒が増加した」と言う。探究によって、生徒自身が学力だけに捉われない自身の個性や能力を発見、自覚できたと言うことに他ならない。この実績は点数では表せない大きな成果をもたらせているものだと感じた。また、探究活動を支える校内体制、外部との連携協力体制の構築とその体制を維持、活性化するために互いの意見やビジョンを交流させること、コーディネーターの役割を果たす中核的教員などの存在があることによって組織全体が駆動している。組織が学び続け、発展していく要素を確認することができた。

実践報告２では教育DX推進による授業改革を通した教師の授業力向上に向けた事例が徳島県鳴門市里浦小学校武知教頭より紹介された。教諭のみならず、管理職も交えた ICT の活用に向けた新しい知識・技能を学び合う場、役職、キャリアに関係なく関わりあう組織がとても印象的であった。管理職が教師の学びに「伴走」することで、教師の主体的な学びへつな

がっている。その教師の学びが子ども達へとつながっていく「学びの相似形」が体現されたものであった。ICT 端末を活用した「他者参照」から子ども達相互の学びの深まりが始まると言う言葉には「真似ぶ（まねぶ）→学ぶ」という「学ぶ」の語源を思い返し、また、同時にその「学び」の主語がどこにあるべきなのか、教師の指導観、評価観の転換の必要性を感じた。

実践報告３では不登校を経験した生徒が多数在籍し、「学びの多様化学校」に指定されている岐阜市立草潤中学校中今教諭から子ども達の学びと、教師の学びを対比させながら、主体的に学ぶ生徒、教師を生み出す環境づくりについて紹介して頂いた。はじめ、「校則なし、学級担任＋個別担任制（生徒が決める）、弾力的な登校スタイル、定期テストは希望制」など「学びの多様化学校」すなわち旧不登校特例校として、生徒達の非認知能力の育成に関わる特徴的なカリキュラムに驚きはしたものの、主体的に学ぶための環境づくりには、一般的な学校にも共通する重要な視点がいくつもあった。「自己選択の場面を数多く持たせること」、「成功体験の積み重ねができる環境が整っていること」はどの教育現場でも、そして生徒のみならず教師にも重要な要素であることは、授業づくりや研修づくりの根幹として位置付けたい。

USJ の V 字回復で有名なマーケターである森岡毅氏のとある番組での話を思い出した。欧米人と日本人の自己肯定感の違いについて「一般的に欧米人は自己肯定感が高く、日本人が低い理由は、行動に起こす頻度の差である」という。行動に起こすことが経験となり、その経験が自信や不安への耐久力となる。さらにその自信を元に次の行動に移すことでポジティブなサイクルができるとのことであった。３つの報告では、生徒や教師が「行動」に移すためのカリキュラムや場面の設定がされており、その行動を「確かな経験」に結びつけるための承認、尊重し合える環境の醸成が図られているという共通点を見出すことができる。

今現在、職場では次年度へ向けた研修計画作成の最終段階に進んでいる。「自走する学校へ」をテーマに、これまでの教育事務所主体の研修から学校主体の研修へと大きな研修改革がなされた。各学校の教職員が自身や自校の強み、課題を話し合い、さらなる伸長、改善に向けて協働して取り組んでいく過程を教育事務所が支援していく。学校のニーズにより沿った研修の形が実現可能な、宮古島という地の利を生かした研修改革である。次年度、スタートしてみないとわからない研修の課題、難題が出てくることは覚悟の上である。職場の同僚性、協働体制で知恵を絞り、対応策、改善策を見出していけば良い。教育事務所の組織としてしなやかに対応する心構えができている。

持続可能なコミュニティ ～ラウンドテーブルに参加して～

学校改革マネジメントコース２年/美浜町立美浜東小学校　一瀬　憲幸

今年もこの時期になった。勤務校では最高学年を担任させていただき、今この文章を綴っている今、卒業式に向け、子どもたちとの最後の日々を楽しんでいる毎日である。教職大学院で学ばせていただいて２年目、大学院生としては最後になるであろう２２月17、18 日の２日間に１年を締めくくる 2024 Spring Sessions に参加させていただいた。今回は自身の長期実践報告をまとめる作業と、聴いていただくにあたっての準備もあり、昨年度よりもさらにバタバタとこの時期を迎えてしまった感がある。

昨年度の同じ時期、教職大学院の諸先輩方の長期実践報告を聴かせていただいたことが思い出される。当時、試行錯誤しながら実践を行い始めていた私にとって、２年という長い道のりの中で紡ぎだされる実践と省察のストーリーは興味深く、引き込まれる熱い内容であった。昨年度の自分自身のふり返りを読み返してみると、以下の内容が記してあった。

『現在私が、校内で進めている実践も「緩くつながり合うコミュニティ」である。しかし授業改善について触れたものはごく一部。普段の学級経営に繋がるものが中心である。そこももちろん大事にしていきたいが、授業実践につながることも話題にして語り合える場にしていきたい。そして、今よりも熱量のあるものに、思考（省察）があるものに、実践があるものにしていきたいと強く思った。』

『充実した一日だった。やはり対話のすばらしさを端々に感じる。そして、日本の津々浦々で、こうやって教育に情熱を傾けながら日々子供に向き合っている先生方がいて、その方たちが日本の教育を支え合っていることのすばらしさを感じることができる。実践-省察-そして新たな展開のすばらしさとともに、自分を語り、互いを語り合うことのできるこの空間の素敵さを、同僚にも伝えていきたい。』

教職大学院で学ばせていただく中で、記録の持つ意味について考えさせられた。これまでは、記録はその場限りになり、読み返すということをそこまで意識していなかったが、記録の当時、自身がどのような思考を巡らせていたのか、どのような方向で自分の実践を方向付けようとしていたのか、そしてどのような心情でいたのか。日々が経過した後で読み直すことによって、今ここから自分自身はどう歩んでいくのか、過去と現在につなげ、深く思考を巡らせることができるようになった気がする。今回のラウンドテーブルに参加し残した記録も、この先機会がある時に読み返していくことを繋げていきたいと考えている。

今回、最も印象に残ったのは「新たな教師の学び」を支える協働のために、学びあうコミュニティを編成するという内容であった。特に印象に残ったのは、高浜町における保育実践研究グループの内容である。保育所の学びを支えるために、町内４つの園のコミュニティを結ぶ取り組みであった。悩み、葛藤しもがきながら取り組みをかさねていく姿、管理職、中堅、若手がそれぞれの立場から、「自分事」として考えることができるようになる過程が、思いをつなぎ合うストーリーとして発表された。私自身が校内のコミュニティから町内のコミュニティへとすそ野を広げていくイメージを持っていることもあり、大変印象深いものであった。ただし、10 年にもわたる歩みを聞かせていただき、私のようなものにそれだけの長い歩みをへこたれることなく進めていけるのだろうかという不安にもさいなまれる。

「緩くつながるコミュニティの確立」、学校内のコミュニティとしてのミニワークショップ、そして、小さな町の３つの学校をデータや簡易で密な連絡によってつないでいけるような試み。この２つは、このあと業務改善にもつなげていくことができると考えている。不安も大きいが、高浜町の歩みのように、私自身もこれからも試行錯誤しながら、連携・協働しながら学び続けることのできる環境の構築へ、自分自身ができることを、その時の自分の立場からこれからもすすめていきたいという想いがこの２日間でさらに強くなった。

一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境を構築する一旦を担っていけたらという思いが私の研究実践課題の根幹になっている。私は学校教育に携わり、よりよい社会創りに貢献したいという志をもって教師になった。全教職員の理解者、伴走者になり、赴任した学校を支え、地域、家庭との協働を大切にし、社会に貢献するという大志をもって今後も研鑽を重ねていきたい。そのことが、これからのよりよい社会創造に必ずつながっていることを信じながら。

校種を超えて語り合う

学校改革マネジメントコース 2 年/まごころ認定こども園　髙尾　和人

2/17,18 に行われた実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions、私は春夏あわせて 4 回目の参加になった。ただし、私は 3 年履修に切り替えさせてもらったので、長期実践記録はまだ書いていない。それでも、2 月半ばを過ぎたこの時期は、卒園児等のこと、次年度準備のこと、事務的な面でいえば各種補助金の申請や補正予算の作成など、考えなければならないことが山ほどある。そのなかで、休日を丸二日つかって、さらには 2 日目には 100 分の発表があるとなると、直前までは少し憂鬱な気分だった。しかし、いつもの通りというか、今回も 2 日目のクロスセッションを終えた後には、充実感と明日へのやる気に満ちた気持ちで帰路についていた。本当に充実した二日間であったと思う。

今回の福井ラウンドテーブルは、1 日目の特別フォーラムでは高浜町立認定こども園・保育所実践研究グループぴっかや福井県の幼児教育研修システムについての報告があり、ゾーンセッションでも、私が参加した ZoneA では「子ども主体の学び」をテーマに越前市立認定こども園服間の報告があった。私が参加してきたラウンドテーブルのなかでは、幼児教育について、最も直接的に触れられていた回であったなかで、中身をより知っていて、その発表内容に至る過程や背景なども想像しやすかった分、今まで参加してきたラウンドテーブルよりいろいろなことを考え、時には少し落ち込んだ気分になりながらも報告を聞くこととなった。私の場合は、同業者の実践例を聞くと、自分の園はまだまだだと感じさせられることが多い。一方で、小・中・高・支援学校等の先生方の実践報告などは、近いながらもどこか別の話という感覚で、素直に話題提供者の話を聞いていることが多かったのだなと再認識した。それは、教職大学院における毎月のカンファレンスにも同じことがいえるし、教職大学院の学びにおけるねらいのひとつなのかもしれない。

様々な校種の先生方や専門職の方のお話を聞かせていただくなかでも、中学校や高校の先生方の探求の授業に関する実践報告は、私にとって新鮮で興味深い話題のひとつになっている。今回のクロスセッションでは、立命館宇治高校の浅野李帆先生が探求に関する実践報告をしてくれた。浅野先生の発表は、立命館宇治高校と仙台第三高校の「古文で学ぶ」交流授業で、お互いに和歌の歌枕を送りあい、それに対して和歌を作成する授業についてであった。相手の高校の生徒から送られてきた歌枕やそれを受けて作成した和歌の意図をお互いに想像しあい、その意味を共有することで、相手のことを考え、どうすれば伝わるか、古文に親しみつつも深いと感じるような交流授業を実践していた。また、送る歌枕には自らの地域にちなんだものを設定し、「自分の地域の魅力を考える」仕掛けづくりなどもされていた他、その年度限りかもしれないが助成金を利用した対面交流を通じて、深く生徒の思い出に残る授業にもなっていた。「こころ」が動く経験が子どもたちの成長に大きく寄与する、これは高校も幼保連携型認定こども園も一緒だと感じる。私たちの園で、私たちは、子ども達に「こころ」が動く経験をどれほどさせてあげることができているだろうか、あらためて考えるきっかけとなった。

また、この実践報告にかかる対話のなかで、もう一つ、浅野先生が報告のなかで課題の一つとしていた「担当者が変わって持続可能な取り組みにするには？」について、対話が広がったことが印象に残っている。これは、このグループに現役、もしくは元管理職が多かったことが大きいと思う。そのなかで、やはり管理職としては、現場の先生のよい取り組みを一過性のものにせず、カリキュラムに取り組むなど、よい取り組みが自走するための仕組みづくりを考えることも大事であると感じた。仕組みになってしまうと、工夫の余地や可能性の広がりがなくなってしまうリスクもあるかもしれないが、すべてを「考えましょう」、「対話しましょう」だと現場が疲れてへとへ

とになってしまうかもしれないし、それができない人がいるかもしれない。すべてはバランスといってしまえばその通りであるが、私の思考のバランスに偏りが生じているかもしれない、そういった気づきもあるグループセッションだった。このような思わぬ気づきがあることも、校種を超えて語り合うことの魅力の一つだとあらためて感じたラウンドテーブルだった。

教職大学院での学びの省察
（長期実践報告/長期実践報告会）

長期実践研究報告を執筆して

ミドルリーダー養成コース 2 年/カリタス女子中学高等学校　稲川　理子

教職大学院入学前から、私は長期実践研究報告の執筆を恐れていた。自分に諸先輩方が書かれたような数十ページの実践研究報告が書けるのだろうか。そもそも、何をテーマにしよう。担当の小林 真由美先生と話し合いを重ね、M2 の春には方向性が決まり、「『自走する子』を育てるために―教師の適切な支援・介入の模索―」をテーマとすることとした。しかしなかなか書き進められずに冬期集中講座を迎えてしまった。

最初は数十ページも書けるのか不安だったが、構想がまとまり書き始めると書きたいことがあふれてきて、時間との戦いとなった。冬期集中講座を終えて、あとはとにかく書くのみという段階になった時、書きたいことを書き切れるのか、自分の満足のいく研究報告が提出できるのか、不安と焦りを感じながら必死に書き進めた。そしてそれと同時に、書くことが楽しくてたまらなかった。この「楽しい」という感情は、書き始める前は想像していなかった気持ちだった。この気持ちを他院生に共有したところ、わかる！と共感してもらえた。なぜ長期実践研究報告を書くことは「楽しい」のだろうか。

私は、長期実践研究報告を書くことで自分と向き合うことができるからでないかと思う。なぜ自分がこう考え行動したのか、自分が大事に思っていたことはなんだったのか。言語化することで今まで曖昧だったものが見えてきたように感じる。また書いていくうちに、うまくいったと思っていた活動の改善点が見えたり、逆にうまくいかなかったと思っていたことでも、良かった点が見えてきたりと、書いていく内に自分の経験や思いを捉え直すことができた。これが長期実践報告を書く意義なのかと身をもって学んだ。

今回長期実践報告を執筆し、自分の実践を振り返り省察した時、柳沢 昌一先生による「実践の持続的な発展を支える記録　三つの実践記録を手がかりに」に書いてある以下の文章の意味が真に理解できた気がした。以下、特に大事だと思ったところに下線を引き、紹介したい。

実践のそれぞれは小さな展開を、時間をかけ、サイクル次いで慎重に積み重ね、そして広く編んでいこうとするとき、<u>記録は小さな展開をつなぎ位置づけるフレイムのような働きを持っている</u>。そして重ねられた記録は、小さな展開の積み重ねが生み出すよ

り大きな発展のサイクルを目に見えるものにする。記録はまた個々の展開の中から見いだされたことをより広く共有する媒体であり、多くの人の理解と参加を支えるものでもある。…それは、これからのより長い、現実的な展開の見通しを立てていく上でかけがえのない手がかりとなるだろう。梃子のようにそれを生かして、次の時代への展望を開いていくこと。変化の時代だからこそ必要だと思う。

実践報告を執筆することは大変な労力を要す。それは、自分の弱さと向き合い、なぜこう思ったのか・行動したのか過去の自分に問いかけ、様々な実践を一つの軸のもとにつなぎ合わせ編みこんでいくからだ。しかし、その価値は確かにあると思う。書き進める度に新しい発見があり、忘れかけていた思いや学びを思い出すこともできた。そして他の人達に自分の記録を読んでもらうことで、自分とは異なる視点からの意見やアドバイスをもらえて世界が広がる感覚があった。

私の長期実践研究報告のテーマは「自走する子を育てる為に教師として何が出来るのか、適切な介入とはなんなのか」ということだが、その答えはまだ見つかっていない。放置、適切な介入、過干渉というのははっきりとした切れ目はなく、グラデーションであり、その判断基準も人によってまちまちだろう。しかし少なくとも生徒の学びを邪魔してはいけない。そのためには目の前の生徒を見つめ、夏期集中講座で読んだ伊那小学校の実践報告にあった「たてた段階でこれ（構想）を捨てるつもり」で、必要に応じて対応を変えられるのがプロの教師なのだろう。私も、固定観念やとらわれから脱却し、「子どもの成長のため」という目的からぶれずに、何が大事で何が大事でないのか見極める力をつけたい。

また「適度な介入・支援」を考えたときに、子どもに選択させるのか、自由に考えさせるのか。助けが必要な場面と待つ必要がある場面をどう見極めるのか。自走する子の育成にあたって、何が適切な介入・支援なのか、教職大学院卒業後も歩みを止めずに教師として学びを続けていきたいと思う。

「語るように」綴る長期実践報告

学校改革マネジメントコース１年/千葉県袖ケ浦市立長浦小学校　犬塚　晶子

２月４日（日）長期実践報告会を、私は楽しみにしていた。福井大学教職大学院に入学してから、少しずつではあるが、自分の教職に対する考え方が変わってきたことを感じていたからである。レポートを書くときは、「語るように」という御指導があり、今まで教科の実践報告や研究紀要を書くときに短く・客観的にと指導されたことがあったからである。この１年で、カンファレンスや集中講義での学びの中で「語るように」書くことの良さを実感した。だから、楽しみであったのである。なぜ「語るように」が良いのか。なぜか、発表者である語り手の物語の中に引き込まれ、自分のことのように考える時間となるからです。カンファレンスもラウンドテーブルも「語るように」話す発表者の世界に引き込まれ、自分の世界にない視点で、教育実践や生き方を自分の課題として捉え考え、感じ、心を動かされることができたからである。今回２人の先生の長期実践報告も素晴らしく、言うまでもなく引き込まれ、胸が熱くなる内容であった。来年の自分の姿と重ね合わせながら長期実践報告を聞くことができた。

矢成清美先生の『豊かなコミュニケーションでみんなをつなぐ』という長期実践報告であった。矢成先生の生い立ちから教育への熱い思いが綴られていた。中でも「教育する＝生活する」というお話である。幼い頃、アダルトチルドレンとして精一杯生きていた頃の絶望感から、光を見いだし何事にも前向きに捉える強さを感じることができた。矢成先生は、思春期のころ絵と古典が好きで心のよりどころとしていた

話や、大学を卒業して教職には就かず、民間企業に就職し30年間勤め上げ、その後東京都の教員になったこと。そして驚いたのは、矢成先生には現在夢があり「学校をつくる」ことである。この言葉を聞いたとき、私は今から２７年前に教員採用試験に何度も不合格になっていた頃のことを思いだした。子どものことを考え、成長する姿を見たい。がんばる子どもの姿が好きで、教員になりたかったことを忘れかけていた。矢成先生の子どもを中心に考え、その子にとって良いことであれば何でもして応援したいという純粋さを感じることができた。どんなに素晴らしく見える教育実践でも、子どものためにどれだけ、真剣に向き合えるか、愛情をもって接することができるか。これが何よりも大切であることを再確認できた。矢成先生は、自分の教育理念を実現するために、「生活をしながら学ぶ小さな学校」をつくりたいとおっしゃっていた。なんだか、近いうちに実現できそうな気がする。

２人目は、一ノ瀬憲幸先生である。『時代が変わり続けても穏やかにつながり合えるコミュニティーを目指して』行政の経験がある私と同年代の先生である。一ノ瀬先生も教員採用試験で苦労された経験があり、教職に対し熱い思いをもたれている方であった。現在６年生の担任をされており、時々児童のことをうれしそうにお話される姿に好感が持てた。一ノ瀬先生のお話の中で、同僚性や協働は自然に起こることは無理だから、努力する必要がある。演技であっても変えようとする努力が必要である。と、お話しされていた。働き方改革に向けて、何ができるか模索中だそうだ。一ノ瀬先生のバイタリティーで、どんな困難でも乗り越えられそうな気がした。何より、一ノ瀬先生のお話は、前向きになる。

今回の報告会で、共感しともに学べたことを大切に、４月から自分らしく研鑽を積んでいきたい。

長期実践報告会を通して

授業研究・教職専門性開発コース１年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

金田　潤之助

今回の長期実践報告会では、一年の終わりということもあり、先生方の報告と同時に自身の経験とのつながりを感じた。そのため、今回の報告では、先生方の 2 年間の学びや過去の教師経験を振り返って得た学びだけでなく、自身と照らし合わせて学んだ事も考えていく。

報告していただいたある先生の長期実践報告では、過去に私が同じグループになった時のことが書かれていた。それは、先生があるイベントを開催するにあたってとても困った状況にあるという話であった。私も話を聞いていて「自分だったらどうなのだろうか」「八方ふさがりな感じなのかもしれない」と感じ先生の悩みはとても印象深かった。そのため外部の方からのアドバイス内容もよく覚えていたし、その後どうなったのかということが気になった。実践報告を聞いていく中で、先生が月間カンファレンスを経てどのように状況が好転し、生徒たちと共にイベントを成功していったのかを知ることができ、安心するとともに先生として将来自分も同じようにできるのだろうかと少し不安になった。また、先生の悩みを思い出すと同時に当時自分が困っていたことも思い出した。それは「追っていた生徒の内面が分からずどう関わっていけば良いのかわからない」ことだった。こちらも先生方から様々なアドバイスを頂き、新たな視点で見ることが出来るようになり月間カンファレンスを通じて悩みが解消されていった。今はそ

の苦悩を思い出すことも減ったが、その子を通してたくさんのことを学ばせてもらったと実感している。

他の先生の報告ではメンターの先生の学級経営のやり方に感激を受けたという話があった。その先生の長期実践報告ではメンターの先生と児童達のやり取りが細かく記載されており先生の冗談についても書かれていた。児童とメンターの先生との話し合いを見て見ると、児童に対して「何をしなければならないのか」を簡潔にわかりやすく説明しており、考えなくてはならない場面では児童に考えさせ自分たちの言葉で話させていた。また話の様子を見て見れば児童とメンターの先生との深い信頼関係を感じた。先生のお話を聞いていて私はメンターの先生が児童の立場で考えて「児童たちだったら」ということを考えて接しているのだなと感じた。また、先生のお話を聞いていて私のメンターの先生も生徒達ととても信頼関係が気付けており、発表頂いた先生と似ていると感じた。生徒たちに簡潔に必要なことを共有して必要以上のことを言わないがとても寄り添いを感じる先生で、生徒達をよく見ていて、冗談で、言葉で、クラスの生徒の立ち位置に合わせて、ここぞというところで色々な角度から引き出しを出していると日々感じていた。先生方のお話を聞くことで、自分のメンターが深く生徒達を考えていることを改めて再認識した。

今回長期実践報告書を聞いて、人それぞれで経験が全く違うということを感じた。これまで培ってきたことも関わってきた人も違うためそれぞれの先生方にドラマがあり、教育観や先生の見えない気持ちも報告会を通して知ることが出来た。

私は大学院に入ってインターンやカンファレンスなどこの一年間で様々な経験をしてきた。その経験により長期的なスパンで見る子供達の成長や教師としての様々な苦悩に触れるなど大学院に入るまで知ることもなかった事柄も触れることが出来た。また私自身の教育観も変わり、生徒達にしてあげられることも増え、理想の教師像も明確になってきていると感じる。先生方の報告に出てきていたがこの大学院での経験は私のターニングポイントになっていくと確信している。

今回の報告会を通してこの一年間を振り返ってみると本当にあっという間であったと感じたが、細かく見て見るとカンファレンスや私自身の生徒達への日々の挑戦などたくさんの出来事があった。今回の長期実践報告会はそんな「漠然とした自分の成長」を細かな部分で見つめ直すことが出来たと感じる。次年度はより多くのことを学び、自分の思う理想像に向けて挑戦していきたい。

長期実践報告会を振り返って

学校改革マネジメントコース１年/葛飾区立常盤中学校　平岡　栄一

今回の長期実践研究報告会では、院生お二人の発表を聴かせていただいた。

最初の方は、英語教師としての自身がどのように形成されていったかについて話された。もともと帰国子女であり、英語には一定の自信があったが、プライドがあり、失敗したくないという思いから勉強せず、あまり英語力が伸びなかった。大学卒業後に働いた学校では、生徒の試験の点数が他の教科に比べて英語だけが芳しくなかったことに衝撃を受ける。そして原因は自身が、プライドだけで勉強していなかったこと、失敗を避けるために課題と向き合っていなかったからだと気づく。そして本気での自身の勉強を始め、また生徒の声に耳を傾けることで、対話の重要性に気づき、自走する生徒の育成につながってきているということや、現在の新たな葛藤についての報告であった。話を聴きながら同じく英語教師としての自分自身のターニングポイントを思い出し、

過去の様々な体験やその時に抱いた考えなどが鮮明に浮かび上がり、多くの共感があった。

次の方は、全国でまだ 20 数校という学びの多様化学校での取り組みについての発表であった。同校での最重要課題は生徒一人一人が心身の安定を取り戻すことであり、年間の授業時数 770 時間、１日あたり４時間で、遅く登校して早く下校できる。そして生徒一人一人は自分で１日の予定を決める。なりたい自分を描き、自分なりの学びを進め、振り返る。学びの場は、家でも学校でもどちらでも良く、学校で学ぶ場合も図書室などを使用することもできる。校則、標準服等はなく、給食、掃除、当番活動、部活動もない。行事は、子どもたちがやりたいものをやる。卒業式を行うかどうかも生徒が話し合いをして決める。例外として命を守る訓練は必ず行う。担任は学年担任と個別担任があり、個別担任は生徒が決めることができ、変更も可能である。定期テストの受験は希望制で、教育通信（通知表）は評定のみ、所見のみ、両方の 3 つのパターンから生徒が選択できる。開校して 3 年間で、1 年目は心身の安定と居場所づくり、2 年目は個別最適な学びの充実、3 年目は協働的な学びの充実をテーマとした。3 年間で運営が安定してきて、エネルギーが溜まってきた生徒が増え、進路状況も成果を上げる一方で、慣れが生じており再構築を行うことや、他校へと異動する教員がいかに同校での取り組みを横展開できるかが課題であるとの報告であった。令和 6 年度に校内適応教室の開室を控えている勤務校での運営について参考にできる情報がとても多く含まれており、どのように応用するかを考えながら聴いた。

ところで、早いもので福井大学連合教職大学院での学びも１年目を終えようとしている。短いようでありながらさまざまな出来事があり、自分自身が大きく変わった１年間でもあった。

入学当初の４月から 11 月頃までは異動があり、課題への対応が次々とあり、困難な事案もあり、良く乗り越えたと思う。その中には本学での学びにより自分自身が変わっていったからこそ対応ができたと感じられる内容もある。

振り返ると、4 月当初は自分の立場からの対応が多かった。もちろんそれは否定すべきことではなく、安定した組織運営には必要なことであるとの考えは変わらない。しかし、10 月から１月くらいにかけて自分は変わったと思う。立場からの対応を踏まえながらも対話を行い、双方が何が問題か、何をどうすべきか、どうしたいか、本心はどこにあるか等を協働しながら明らかにして、誰もがその対応が全ての人々が尊重され、価値ある対応だと感じたからこそよい結果につながったのだと思う。

本学の学びの最大の特徴は、対話にある。毎月のカンファレンス、ラウンドテーブル、集中講座、長期実践研究報告会等では十分に時間を取った対話が行われ、他者の実践や考え方の変化に耳を傾け、また自分の実践や気持ちの動きを率直に述べ、質問を受けたり、感想をいただいたりする。この時に他者との対話だけでなく、自己との対話も無意識のうちに行われ、さまざまな気づきや考えの変化が生まれる。また言葉にした自分の考えはいつの間にか自分の行動にもつながっていく。

また今回の振り返りを書くにあたって、過去の NL を読む中で、各院生がそれぞれ思いを込め試行錯誤しながら自ら改革に果敢に挑む様子がはっきりと読み取れ、改めて勇気が湧いてきた。それらの改革に共通しているのは、勇気をもって一歩を踏み出すが、肩の力を抜き、対話から素直に学び、自分自身が変わっていくことだと感じている。

本学での学びは折り返し点を迎えるが、今年度に対話から学んだこと、立場や世代を越えた方からもらった新たな視点を活かして次年度も学校や自身の所属する多くの組織や実践コミュニティにおいて全ての方々のかけがえのない良さを発揮していただき、誰もがゆったりと堂々とした気持ちでやるべきこと、また実現したいことを組織の一員としても、個人としても皆が実現できることを目指していく。関わった全ての方々に深く感謝する。

長期実践研究報告会に参加して

学校改革マネジメントコース１年/岐阜市立加納中学校　今井　良昌

長期実践研究報告会に聞き手として参加し，２名の先生の報告を聞いた。両者の長期実践報告を聞き，他者の物語と自分を重ね合わせることの価値に触れる事ができた。教職大学院に入学して一年，カンファレンスを通して，県や校種，経験年数の違う他者との対話を通して自身及び今取り組んでいる実践を見つめてきた。その都度，新たな視点に気付き，それが刺激的で岐阜から福井まで車を走らせるのが楽しみでもあった。入学当初の４月には，「なぜこれまでの教職人生を振り返るのか？」という疑問もあったが，それは，この長期実践研究報告会につながるものであり，そしてこれからの教職人生や未来につながる必要な事であったのだと納得した。各自が今課題と思っていることや実践していることは，これまでの人生がかかわっていることであり，その物語を読み，聞くことで，その人の教師としての歩みを追体験することができる。それは，ただのハウツーではない，それ以上の知識の財産であると感じた。

福井大学教育学部附属義務教育学校の松浦妃南先生の報告「授業観の形成の過程をたどる」では，教師になるということは，まさにこのような過程をたどることなのだということを率直に感じた。子どもを見取る力，その見取りを授業に生かすこと，その力をつけるための過程が詳細に記されていた。まさに私の勤務校で行なっている「指導と評価の一体化事業」と直結している内容でもあり，このような実践記録を新規採用や経験年数の若い教師が読むことを薦めたいという思いをもった。それだけでなく，自分自身の今までの実践を思い返し，このような実践記録を若い時に読みたかったという思いに駆られた。

私たち教師は，目の前の児童生徒のことを第一に考えなければいけないが，ともすれば，我々教師のやりたいこと，したいことを児童生徒に押し付けてしまいがちである。そうならないようにという自戒の念をもちながら，日々教壇に立っているのではあるが，ふと気付けば…，という自身の姿を恥じながら初心を忘れずに，子どもと向き合っていきたいという爽やかな気持ちになった。

福井県立藤島高校の鈴木聡史先生の報告「問うて語りうるコミュニティとは」については，鈴木先生の行動力や戦略に甚だ感心した。以前のカンファレンスでご一緒した時にも，その姿に火を付けられ，やる気をもらったが，今回は自分のこの一年間を振り返り，このような実践が自分にできるのかという不安な気持ちをもったことも正直なところである。とはいえ，どうやって実践コミュニティをつくり上げていったのかというその過程が丁寧に綴られており，今回もこれからの自分の実践に生かせることをたくさん教えてもらえた。

教育の現場というのは，エビデンスがない中で，行動・選択せねばならない場であり，一般性を求めていくことの難しさがあるが，このような長期実践論文に綴られた，一つ一つの小さな実践が理論であり，そこから得られる手続き的知識が，私のようなまた別の実践者の実践に生かされ，往還されて，共創されていくのだということを感じた有意義な時間であった。

この会を通して，次の一年間で，自分に何ができるか不安もあるが，現在構想中である校内の実践コミュニティを形にしていきたいという思いを強くすることができた。

長期実践研究報告会を終えて

学校改革マネジメントコース２年/宮古島市教育委員会　砂川　誠

２月４日に長期実践研究報告会が実施されました。１月 31 日まで提出の長期研究報告書を書き終えたばかりでしたが、書き綴った内容を言葉にして語ることで、これまでの教職の実践やその意味、そして大学院での学びについて、新たな気づきを得ることができたように感じました。そして、気がつけば、自分の報告の時間があっという間に過ぎていってしまいました。

このように、長期実践研究報告会では、「学び・立ち止まり・省察する」ことで、これまでの自分の実践を価値づけるとともに、実践の新たな意味を見出すことにつながるのだと実感することができたのでした。

ところで、学校現場の多忙化がよく話題となりますが、忙しい中だからこそ、教師は、「学び」「立ち止まり」「振り返る」ことを意識することが大切なのだと考えています。

私自身、理論を学び、長期研究報告書をまとめ、報告することで、これまでの教職の実践の価値や意味を見出すことができ、「自分はこれまでがんばってきたんだな」とちょっとだけ自分をほめたくなりました。そして、次の実践への意欲付けとなり、今後の展望についても構想することができました。

このように、立ち止まり、自分の実践を振り返る機会を持つことが、教師のモチベーションを高め、多忙化の解消へと繋がっていくことになるのではないかと考えるようになっています。

そして、そのためには、「実践を語り、聴き合う」という対話の場が大切になってくることをあらためて長期実践研究報告会で確認することができました。つたない報告を暖かく聞いていただいた皆さんに感謝するとともに、このような対話の場の必要性を強く感じました。

また、この長期実践研究報告会では、同じように今年度長期研究報告書を執筆なされた先生の報告を聞くことができました。

多くの共感する言葉があったのですが、「これまでより、話し合いの場で発言ができるようになった。」「自分自身を大切に思えることで、他の人のことも大切に思えるようになった。」というような報告が印象に残りました。

「自分の思いや考えを言語化し語ることができるようになること」や「これまでの実践を振り返り、価値付けを行う事で、自分や周りの方々に優しくなれたこと」は私の大学院での学びに共通するものであったと思います。

私がこのように、長期実践研究報告会までたどりつくことができたのは、周りの多くの方々に支えていただいたおかげだと感謝しています。

そして、長期実践研究報告会を終えた今、大学院での学びを子供たちの成長へと繋げていくことが、本当の意味での大学院での学びを生かしたことになると肝に銘じ、今後の実践を積み重ねていこうと決意しているところです。

事務連絡

Schedule【予定】

4/6 Sun.	開講式
4/20, 21 Sat., Sun.	月間カンファレンス A 日程
4/27, 28 Sat., Sun.	月間カンファレンス B 日程

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】本年度最後のニュースレターをお届けします。今回は、2 月に実施された長期実践報告会やラウンドテーブルの振り返りが多く掲載されています。多くの院生さんたちにとって、「対話とは何か」について再考する機会となったようです。対話には、「自分が正解だと思っていたこと（実践の自分の捉え方、価値）について考えが変わったり、新たな気づきを得たりすることで、自分の世界を広げる」という効用があるそうです。そんな手ごたえを感じられたのではないでしょうか。まもなく、全国各地から桜の便りが届くようになります。桜を愛でながら対話を楽しみ、新たな旅立ちに思いを馳せる時期となります。（I.O.）

教職大学院 Newsletter　No.180

2024.3.29　公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp